

日本産学フォーラム 第14回リベラルアーツ企業研修会
(2020年9月2日 オンライン開催)

藤山座長：日本産学フォーラム・リベラルアーツ企業研修会の第14回目でございます。14回目っていうのは、もうトリの一つ前ということなんですけども、ご案内のように、民主主義と市場原理と科学技術っていうのが近代グローバリズムの規範だろうということで、3掛ける3で九つのテーマで、現在、過去、未来みたいな感じで議論をするという機会をつくり、さらにその一番最初の3回に、リベラルアーツとは何かとか、グローバリズムの規範とは何かとか、それからきょう、オブザーバーで来ていただいている瀧先生には、西洋のものの考え方っていう話をしていただいたということがあります。

後半部分は三つからなっていて、政治と宗教ということで、前回、ライシテの話を東大の伊達先生からしていただいて、フランスにおけるキリスト教と政治、今はイスラム教、ムスリムと政治との関係、共和国との関係、こういったことをお話しいただいたんですけども。きょうは、いよいよ東洋の思想というものが、今までリベラルアーツっていうのは、ある意味ではヨーロッパ、アメリカの文化の中でつくられてきたものっていうのを中心に、それが世界を制覇しちゃったんで、しょうがなかったわけですけども、しかし、全く違う考え方で東洋というものがあって、その東洋の考え方がこれからのグローバリズムの揺れに対して、どんな働き掛けができるのかというようなことっていうのは、当然、われわれは知っておかなければいけないということで、その辺りの、東洋の思想の独自性、日本の思想の独自性みたいなことを含めて、この世界では最も最高の権威であります、竹村牧男先生、東洋大学前学長でいらっしゃいますが、にきょうはおいでをいただきました。

僕が竹村先生に声を掛けたのは、実は骨董屋さんで。骨董屋さんのおやじさんが、「藤山さん、あの方、知ってるでしょ」って言って、ぱっと見たら、アスペンでお話しいただいた先生だと思って、それでお声をお掛けしたっていうところから実は始まってまして。非常に奇縁であるなというふうに思っているわけです。竹村先生は東京都の出身でいらっしゃって、小石川高校から東京大学、それでインド哲学科に入られているんですけども、本当のご専門っていうのは唯識だとか華嚴だとかっていう、そういう仏教哲学のところということを知っています。特に西田幾多郎であるとか鈴木大拙であるとか、その辺りの、明治になってからの宗教哲学にも詳しいし、鈴木大拙の弟子であったアキモトリユウミン師匠は、竹村先生の師匠であるというふうに伺っております。

きょうは『東洋・日本思想の独自性と日本の役割』という形でまずお話をいただいて、それから皆さんでディスカッションをしたいというふうに思います。それでは、簡単なお紹介で失礼をいたしましたけれども、竹村先生、お願いできますでしょうか。

竹村先生：はい。どうも。

(以下、竹村先生の講演部分は、竹村先生より頂戴しましたフルペーパーより転載。)

「東洋・日本思想の独自性と日本の役割」

竹村 牧男

はじめに

皆さん、こんばんは。多分初めての方が多くと思いますが、竹村牧男です。専門は広く浅く、仏教の勉強をしまして、最近は特に空海に関心を集めています。一方、私の禅の先生で鈴木大拙の愛弟子である秋月龍珉の影響で、西田幾多郎・鈴木大拙などにも親しんできました。それで、自分の専門を述べるときは、仏教学・宗教哲学とっております。

この3月末日で、東洋大学の学長を退任し、同時に大学も退職しまして、今は、新型コロナのこともあって、ほとんど義務はなくてのんびり過ごしており、人前で話すのはまったく久しぶりです。それで、うまくお話できるか、特に持久力があるか心配ですが、ともあれしばらくお話させていただきます。

高等教育におけるグローバル人材の育成

グローバリゼーションの時代ということで、学長の時は、キャンパスの国際化、グローバル人材の育成に努めてきました。皆さんはもう十分にグローバル人材でいらっしゃるわけですが、高等教育の世界では、グローバル人材とは何かについて、次のようなことが言われました。まず、グローバル人材の定義として、次のようなことが言われています。

01 グローバル化が進展している世界の中で、主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドを持つ同僚、取引先、顧客等に自分の考えをわかりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、さらにはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材。(文科省・経産省「産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会」報告書、平成22年4月)

また、そのために必要な能力として、次のようなことが言われています。

02 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、
責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

このほか、「幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと(異質な者

の集団をまとめるリーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等）も必要
（グローバル人材育成推進会議「審議まとめ」、平成 24 年（2012）6 月 4 日。内閣官房国家戦略室におかれた国家戦略会議の「日本再生戦略」への議論）

ここにある「異文化に対する理解」に関連しまして、「異文化理解活用力」が必要なのだと言われていまして、その力については、次のようなことが言われています。

03①「異文化の差」が存在することを認識して行動すること、

②「異文化の差」を「良い・悪い」と判断せず、興味・理解を示し、柔軟に対応できると、

③「異文化の差」を持った多様な人々の中で比較した場合の、自分を含めたそれぞれの強みを認識し、それらを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことが可能なこと。（文科省・経産省「産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会」報告書、平成 22 年 4 月）

さらに、「グローバル・ビジネス」の事例から「グローバル・リーダー」と呼ばれるような人材には、高いレベルの公共心、倫理観が必要とされているとして、

04「個別企業の利益を超えて、進出先企業と進出国の繁栄、さらには、国際社会の繁栄を考え、より良い社会の形成のために国際的な活動においてリーダーシップを発揮し、状況を分析し、判断し、決断し、実行できる人材」が求められるとし、実際に、「個別の企業の利益を超えて、国や国際社会の繁栄を考える」ことを意識的に実践している経営者がいる企業ほど、海外売上高比率、売上高営業利益率が高いというデータがある。

とも紹介されています。（同前）

上述の議論に加えて、前に日本人としてのアイデンティティということが言われていましたが、私は、伝統的な文化や価値観について、他者に説明できる能力、自文化理解発信力がもっとも重要だと言って、カリキュラムにおいてもその点に配慮してきました。

ともあれ、学長時代にはグローバル人材の育成を最大の目標として、大学運営に取り組んできたわけです。これは、東洋大学だけでなく、他の多くの大学がこの路線を歩もうとしていました。

新国際秩序の形成と SDGs

確かに、こうした姿勢を国際社会の誰もが持つようになれば、現代社会のあり方は、協調性に富んだ、理想的なあり方に近づいてくると思います。このことをあらゆる方面で、大規模に進めようとするのが、今、国連を中心に推進されている SDGs ではないでしょうか。

皆さんはすでにもうよくご存知だと思いますが、詳しくは、

05「我々の世界を変革する：持続可能な開発のためのアジェンダ 2030」(Transforming Our World:2030 Agenda for Sustainable Development) というもので、2016 年から 2030 年までの間に達成すべき、17 持続可能な開発目標と 169 のターゲットから成っているものです。

実は、2001 年から 2015 年までの目標として策定された MDGs (Millennium Development Goals) というものがありました。それは途上国の開発支援を目指したもので、先進国はその当事者ではありませんでした。SDGs は、世界各国の政府および NGO/NPO、企業等の共通の課題として策定されたもので、グローバル化時代に生きる誰もの課題となっています。これは 2011 年の国連総会における、決して大国ではないコロンビア政府による提案を基とし、その後、さまざまな機関の参加の下、4 年間のオープンな討議を経て採択されたもので、ボトムアップ型の特徴も有しているものでもあります。その意味でもこの SDGs への貢献を、地球市民でもある私たちはぜひ考えていくべきかと思います。

簡略に、その一七の目標を掲げますと、次のようです。

- ① 貧困をなくそう、②飢餓をゼロに、③すべての人に健康と福祉を、
- ④質の高い教育をみんなに、⑤ジェンダー平等を実現しよう、
- ⑥安全な水とトイレを世界中に、⑦エネルギーをみんなに そしてクリーンに、
- ⑧働きがいも 経済成長も、⑨産業と技術革新の基盤をつくろう、
- ⑩人や国の不平等をなくそう、⑪住み続けられるまちづくりを、
- ⑫つくる責任 つかう責任、⑬気候変動に具体的な対策を、
- ⑭海の豊かさを守ろう、⑮陸の豊かさを守ろう、⑯平和と公正をすべての人に、
- ⑰パートナーシップで目標を達成しよう

ここには、貧困、教育、健康、平等な社会、産業、環境、平和等々、現在の地球社会が抱えるありとあらゆる課題が挙げられています。世界中の人間の誰一人取り残さない (Leave no one behind) ためにも、いずれもグローバルに解決すべき重要な課題でしょう。

各開発目標は、2030 年までに達成すると宣言されています。しかしそれらを十全に達成するには、さまざまな困難が横たわっていると思われ、道のりは遠いと思わざるをえません。この SDGs の組織・体制等にも、あるいは思わぬ問題が潜んでいるのかもしれませんが。その辺は、私はよく解っておりません。また、特に新型コロナのパンデミックによって、その実現への歩みはすでに停滞ないし後退しているのではないかと危惧されます。そうではあっても、SDGs そのものは地球全体で真摯に追求すべき課題であることから、どうすればこの理想を実現していけるのか、できる限りの努力を継続していくべきだと、私は思います。

グローバリゼーションと宗教

しかし現実には、グローバリゼーションの動きには、今日、かなりブレーキがかかっていると思います。よくいわれるのが、イギリスのEU脱退、そしてアメリカのトランプ大統領のアメリカ・ファースト主義、最近是中国の覇権主義、等々。これに新型コロナが加わって、国際間の移動はかなり制限されてしまい、もはやグローバリゼーションは風前の灯かもしれません。

06 その背景には、現実には国家の枠組みを克服しきれないこと、やはり国益の擁護が各国の最大の目標になっていることがあるかと思います。市場経済では、安い労働力に基づく安価な商品の氾濫は、自国の脅威になります。民主主義はおのずから俗っぽいポピュリズムになります。自然科学は、競争原理の中で秘密主義になり、また商業主義と結びついて企業や国家の利益のために歪められていきます。

こうした中で、新たな国際秩序を形成するには、どうすべきなのか、私のように実社会とはほぼ無縁の学問をしてきた者には、とうてい解答は見つかりません。素朴に過ぎるかもしれませんが、せめてSDGsの理念と実践が浸透していくことを願うのみです。

さて、このような状況に、宗教はどのように関わりうるのでしょうか。多様な宗教を一元化することはとうていできないでしょうから、その多様性を現代のグローバリゼーションの中でどのように保障していくかが問われることでしょう。宗教は主に教団として存在していますが、それらの指導者があつまって、対話を深め、信仰の差異を超えて平和の実現に貢献しよう、という国際的な団体もあります。そこでは、人間観・世界観の根本的な差異はひとまず置いておいて、協力できる部分で協力しましょうというスタンスにならざるを得ないと思います。そのような立場もダイバーシティの尊重という観点からすれば、非常に重要なことだと思います。

07 その代表格と言えるかと思いますが、世界宗教者平和会議 WCRP というものがあり、日本ではその日本委員会が活動を展開しています。ご参考までにその定款（公益財団法人）から、目的と事業を挙げてみましょう。

（目的）

第3条 この法人は、各宗教の聖旨と伝統を恭敬しつつ、宗教協力と国際連帯のもとに、人類救済の聖業に献身し、世界平和の確立及び文化の向上に寄与することを目的とする。

（事業）

第4条 この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 宗教の相互理解と協力提携を促進する活動
- (2) 宗教と平和に関する諸問題の調査研究
- (3) 諸宗教間の対話・協力を通じた平和のための公益活動の普及、啓発事業及び提言事業
- (4) 宗教の叡智に基づいた人間教育のあり方を示し、平和に寄与するための平和教育及び

倫理教育を促進する活動

(5) 平和を脅かす諸課題の解決のための人道的平和活動及び国際協力を促進する活動

(6) 国際連合及び国際連合関連機関をはじめとする平和に取り組む各界諸機関との協力活動

(7) 世界宗教者平和会議国際委員会、アジア宗教者平和会議および各国委員会との連絡と交流の促進

(8) 世界宗教者平和会議世界大会及びアジア宗教者平和会議大会への参画

(9) 自然災害及び紛争等による被災者への緊急人道支援

(10) 前各号の事業に附帯する事業、その他この法人の目的を達成するために必要な事業
2 前項の事業については、本邦及び海外において行うものとする。

(公益財団法人世界宗教者平和会議 WCRP 日本委員会ホームページから)

しかし一方、宗教が新国際秩序の形成に貢献する道として、ある宗教的立場から、もう一度、人間存在の根源的構造を明るみに出し、そこから従来にない新たな文明原理を創造し、これを発信していくことによって新たな国際秩序の形成に取り組む、という道もあるかと思ひます。もちろん、それは決して独善的な者であつてはならず、十分に論理的で、普遍的に妥当性のあるものでなければならないでしょう。いきなり飛躍的かもしれませんが、そういう道もありうるのではないかと思ひます。

07 特に今日の現代社会が、近代欧米の合理主義に基づくものであるとき、その立場を根本的に考え直すということは、少なくとも必須のことであると思ひられます。その近代合理主義は、ごく簡単に言えば、「主客二元論に基づく要素還元主義」と言つてよいでしょう。この立場は、社会的には、もとより独立した個人の集合を基礎に、その全体をどう調整するか、という方向になるかと思ひます。

これに対し、東洋・日本では、主客未分の地平もふまへつつ、いわば関係主義的な人間観・世界観を提示してきたと思ひます。実は環境問題が起きてきた中で、西洋の側から、エコロジーの提唱があり、特にノルウェーのアルネ・ネスの「ディープ・エコロジー」などは、東洋思想に非常に親和的と考えられました。自己を個体のみに限定せず、関係するすべてにまで拡大して自己を理解して、そこから物事を考えていこうとするものです。

ともあれ、そういう意味で、東洋・日本の思想から、もう一度、本来の人間のあり方、世界のあり方を認識し直し、それを現代文明を変革していく思想として発信していくことは、考えられてよいだろうと思ひます。すなわち、日本発のグローバル・スタンダードを地球社会に提案していくべきではないでしょうか。

西洋の特質・東洋の特質

とはいうものの、だいぶ大ぶろしきを広げたわけで、そううまくは行かないと思ひますが、こうしたことを、皆さんが考えていく際の一つの材料を提供するという意味で、日本近代の

最大の哲学者・西田幾多郎や、国際社会で日本の思想家としてもっとも高く評価されている鈴木大拙の思想を、今日をご紹介します。くしくも、西田と大拙は明治3年、1870年の生まれで、今年は生誕150周年に当たります。

というか、すでに事前に読んでいただいた、ということかと思います。今日は、その本にはあまり書いていなかったことも含め、『〈宗教〉の核心』では、「第二章、西田幾多郎の宗教哲学」の「第二節、寸心の禅思想」、「第三章、仏教から西田哲学へ」の、「五 西田哲学と共生の問題」、あたりに関わることを中心にお話させていただきます。

話がもう一度、西洋と東洋という前の問題に戻りますが、大拙は、西洋の根底にある考え方は、divide and ruleにあると言いました。

08 ラテン語で divide et impera というのがある。英語に訳すると、divide and rule の義だという。すなわち「分けて制する」とでも邦訳すべきか。なんでも政治か軍事上の言葉らしい。相手になるものの勢力を分割して、其の間に闘争を起こさしめ、それで弱まるところを打って、屈服させるのである。ところが、この語は不思議に西洋思想や文化の特性を剝切に表現している。

分割は知性である。まず主と客とをわけける。われと人、自分と世界、心と物、天と地、陰と陽、など、すべて分けることが知性である。主客の分別をつけないと、知識が成立せぬ。知るものと知られるもの——この二元制からわれらの知識が出てきて、それから次から次へと発展してゆく。哲学も科学も、何もかも、これから出る。個の世界、多の世界を見てゆくの、西洋思想の特徴である。

それから、分けると、分けられた物の間に争いの起こるのは当然だ。すなわち、力の世界がそこから開けてくる。力とは勝負である。……この征服欲が力、すなわち各種のインペリアルイズム（侵略主義）の実現となる。自由の一面にはこの性格が見られる。（『東洋的な見方』、『全集』第20巻、284～285頁）

09 東洋的な見方または考え方の西洋のと相異なる一大要点はこうである。西洋では物が二つに分かれてからを基礎として考え進む。東洋はその反対で、二つに分かれぬさきから踏み出す。……それで西洋の考え方は、二元から始まるとしておく。

二つに分かれてくると、相対の世界、対抗の世界、争いの世界、力の世界などいうものが、次から次へと起こってくる。西洋に科学や哲学が、東洋にまさって発達し、したがって技術の面にも、法律的組織の面にも、著しい進歩を見るのは、いずれも個に対して異常な好奇心を持っているからである。東洋はこの点において大いに学ばねばならぬ。対抗の世界、個の世界、力の世界では、いつも相対的關係なるものが、弥が上に、無尽に重なりゆくので、絶対個は考えられぬ。いつも何かに関連しなければ考えられぬ。個は、それゆえに、常住、何らかの意味で拘繋・束縛・圧迫などいうものを感じずにはおれぬ。すなわち個は平生いつも

不自由の立場におかれる。自ら動き出ることの代わりに、他からの脅迫感を抱くことになる。たとい無意識にしても、そのような感じは、不断あるにきまっている。(同前、221 頁)

こうして、西洋的な考え方では、どうも落ち着けないとしています。そして、この考え方は、結局、自我、集団我、国家我にむすびついていくとも言っています。

それに対して東洋では、二元性の分かれる以前をつかんでおり、そこに東洋の独自性があると言います。

10「光あれ」という心が、神の胸に動き出さんとする、その刹那に触れんとするのが、東洋民族の心理であるのに対して、欧米的心理は、「光」が現われてからの事象に没頭するのである。〔この後、主客・明暗未分以前＝恍惚・渾沌・無状の状、無象の象・天下谿・天下谷・玄牝・無極・樸等々について語られる。〕ここに未だ発言せざる神がいる。神が何かをいうときに、樸の散ずるところ、無象の象に名のつけられるところで、これから万物が生まれ出る母性が成立する。分割が行ぜられる。万物分割の知性を認識すること、これもとより大事だが、「その母を守る」ことを忘れてはならぬ。東洋民族の意識・心理・思想・文化の根源には、この母を守るということがある。母である、父ではない、これを忘れてはならぬ。

……彼らの神は父であって母でない。父は力と律法と義とで統御する。母は無条件の愛でなにもかも包容する。善いとか悪いとかいわぬ。いずれも併呑して「改めず、あやうからず」である。西洋の愛には力の残りかすがある。東洋のは十方豁開である。八方開きである。どこからでも入ってこられる。」(同前、286～287 頁)

東洋人や日本人には、このように西洋の分断主義、要素還元主義、個人主義を克服する視点を有しており、これを世界に向けて発信していくべきだと言うのです。

大拙の戦後日本の再興への視点と華嚴思想

一方、東洋の問題とはまた異なるテーマになりますが、実は大拙は、戦後間もない頃、戦前の日本のあり方を厳しく批判し、新たな社会秩序の形成を構想しました。その批判と提言のありようは、以下のようです。

11 天皇が高天原から降りて、この大地の上に、人間として青人草の仲間入りをなされると同時に、青人草の国民の方では、いつまでも淤泥の中に沈滞して行くというような奴隷的自卑根性を放擲しなければならぬ。個己の自主性を樹立し、人格的価値の他に換えるべきものがないということを十分に認識し、自ら尊ぶはまた大に他を尊ぶ所以であることを覚悟しなければならぬ。個個円成であると同時に事事無礙である。或はこういってもよい。——個個円成の故に事事無礙である。事事無礙の故に個個円成であると。これが実に法界の様相である。東洋的思想、東洋的感覚、東洋的生活の基底に流れて居る根本原理である。多くの場

合、今まではこれを十分に意識しなかったということはある。これからはこの方面に対する認識を、あらゆる方向に、深めつまた明らかにして行かなくてはならぬ。霊性的日本は、この如くにして建設せられる。これが自分の確信である。そしてこれに先だって霊性的自覚の必要であることは言をまたないであろう。（『霊性的日本の建設』、『全集』第9巻、147～148頁）

ここには、事事無礙という言葉が出てきていますが、それは、仏教の華嚴宗で用いられる言葉です。華嚴宗の思想は、『華嚴經』に基づき、唐の時代の賢首大師法蔵が大成したもので、日本では東大寺がこの華嚴宗のいわば総本山です。大拙は、上に天皇がおり、下に民衆がいて、民衆はお上の言うことにしたがわなければならないというあり方を痛烈に批判し、天皇も含めて誰もが同列に完全なる存在であるとともに、自主性を確立しつつしかも他の人格を尊重していくあり方を、華嚴思想を基に構想して発信したのでした。いわば、新たな社会秩序を華嚴思想から理論づけようとしたのです。

実は大拙は、華嚴思想を、これこそ「東洋思想の精華である」と高く評価していました。たとえば、次のようにも言っています。

12『華嚴經』に盛られてある思想は、実に東洋——インド・シナ・日本にて発展し温存せられてあるものの最高頂です。般若的空思想がここまで発展したということは実に驚くべき歴史的事実です。もし日本に何か世界宗教思想の上に貢献すべきものを持っているとすれば、それは華嚴の教説にほかならないのです。（『仏教の大意』、『全集』第7巻、45頁）

大拙がそこまで評価する華嚴思想とは、どのようなものでしょうか。以下、ごく簡単に華嚴思想について紹介しておきますと、

13 華嚴思想では、「事法界・理法界・理事無礙法界・事事無礙法界」という、四種法界の説を唱えます。

事法界は、個々別々の事物の世界です。ただし事とある以上、各人におけるそのつどそのつどの主客相関の事象そのものと見るべきでしょう。

理法界の理は、論理とか摂理とかのことではなく、究極の普遍なるものを意味しています。それは仏教では、ありとあらゆるものが、常住の本体は持たないこと、空であることにほかなりません。これを空性といいます。この空性をまた、諸法の本性としての法性といい、さらに真実・如常なる真如とも言います。理法界とは、この空性・法性・真如のことを意味します。

理事無礙法界とは、事と理とが無礙に融け合っている世界です。法性は諸法の本性ですから、諸法と別ではありません。しかし諸法は個別、法性は普遍で、同じとも言えません。別なのですが、融け合っているわけです。事と理とは、その関係にあるわけです。ここは、『般若心経』における「色即是空・空即是色」と同じです。この空は、空性のことです。事は相

対、理は絶対といえ、相対と絶対とは融け合っているということです。

この理事無礙法界をふまえて、理を通じて、事と事とが融け合うことになります。ここが事事無礙法界です。松は竹であり、竹は松である。私は汝であり、彼・彼女であり、汝は私であり、彼・彼女であり、といった世界です。ここで理が消えているのは、「真如は自性を守らない、隨縁して諸法となる」という考え方があるからでもあります。つまり絶対は絶対自身を守らない、絶対を自ら否定して相対によみがえるということです。実はこの考え方は、西田の哲学に深く通じ合っています。

ともかく、華嚴思想では、事事無礙法界ということを使うのです。これは、『華嚴經』では、譬喩などによって、さかんに、一入一切・一切入一、一即一切・一切即一といったことを説いているのですが、その見方を別の仕方で表現したものでしょう。大拙は、西洋でも理事無礙法界までは説く思想は無いわけではない、しかし事事無礙法界は西洋にはない、これが東洋の最高峰の教えだと自らの見解を述べています。

14 法界の真相は事事無礙を会するときに始めて認覚せられるのである。理事無礙としての法界は哲学者にも神学者にも略々通ずると思われるが、事事無礙の法界は彼らの未だ到り得ざるところであると信ずる。この最後の法界観は汎神論でもなければ、汎一神論でもない、また神秘論と同一視せらるべきでもない。心すべきである。(同前、55 頁)

靈性的日本の建設へ

この華嚴思想に基づいて、大拙は前にも引いたように、「靈性的日本の建設」を訴えたのでした。このことを、比較的わかりやすく説いたものが、次の説です。

15 私利私欲の人でも自主的に考えることは可能であるが、彼は自らの主人公にはまだなっていない。彼はいつも自利的な物の見方をしている。自利的に物を見るということは、本能的に自らに使われているということである。自分の主人公となる人は、自分を使うことの出来る人である。自分を社会の一員として、自分の思惟と行為は社会的に環境的に働きかけるもの、また働きかけて共同生活に意義を持たすべきものと考え、自利的な考え方をなさないのである。自利自愛の心に自ら限定を加え得る人でないと、自ら主人公となったとはいわれぬ。それ故、自主的に考えるということには、単なる知性的分別上の意味だけでなく、社会的・道徳的意味を兼ね含んでいるといわなくてはならぬ。

こうなると、自ら主人公となることは、他をしてまた他自らの主人公たらしめることでなくてはならぬ。これはどのような意味かというに、自らを重んずるは他を重んずるものであるということである。即ち自分が道徳的人格であることを自覚するものは、また能く他の道徳的人格たることを認むるものである。孔子は、「己立たんと欲して人を立つ」というが、当時は如何なる意味に解せられたにしても、今日自分等の解釈によれば、「己立つ」は自家の道徳的人格を意識することである、さうしてこの意識は自家底のみで成立す

るものでなくて、まず「人の立つ」ことが要請せられる。人が立てば己も自ら立つことになる。己だけを立てんとすると、ついには人を立たしめざることになるのである。事実、己だけが立ち得べき理由はないのである。孔子はまた「己達せんと欲して人を達す」とも言い、また「己に克ちて礼を復む」とも言う。いずれも他の人格を尊重するの義に外ならぬのである。自主的の考え方はこれでないとなんか成立しない。……（『自主的に考える』、『全集』第9巻、319頁）

その背景にあるべきものを、次の説に見ることが出来ます。

16 個己の人格的自主的価値性を認識して、これを尊重することは、力の世界では不可能なことである。力より以上のものに撞着しない限り、そのような余裕は力のみの中からは出てこない。自らの価値を尊重するが故に他の（価値）をもまた尊重するということは、自と他とがいずれもより大なるものの中に生きていくとの自覚から出るのである。自と他とはそれより大なるものの中に同等の地位を占めて対立しているのである。より大なるものに包まれているということは、自をそれで否定することである。換言すると、自の否定によりて自はそのより大なるものに生きる。そして兼ねてそこにおいて他と対して立つのである。自に他を見、他に自を見るとき、両者の間に起こる関係が個々の人格の尊重である。仏者はこれを平等即差別、差別即平等の理といっている。（『靈性的日本の建設』、『全集』第9巻、138頁）

最後の「平等即差別・差別即平等」はいわば理事無礙法界を意味するものですが、自他の相互尊重が実現した世界は、むしろ事事無礙法界というべきでしょう。

西田哲学における個の構造 超個の個

実はこの考え方は、西田の考え方と一致したものです。西田哲学の本質は何かといえば、私は「個物の哲学」というべきだと思っています。西田は、処女作、『善の研究』において、主客未分の純粹経験から出発して、ある事物を、それが場所にある場所、その場所とともに見ていく、場所の哲学に移っていきます。そして最終的に、個物とそれが置かれている場所を明らかにしていきます。ここで個物とは、自分で自分を決定できるもののことです。それは、何のものにも束縛されるものであってはなりません。そこで、そういう個物が置かれている場所は、絶対無ということにもなるわけです。この辺を、西田は、次のように言っています。ここは、西田最後の論文「場所的論理と宗教的世界観」において、禪の悟り、見性について、西田が語ったところです。

17 我国文化が多大の影響を受けたと思われる禅については、その道の人に譲りたい。私は、唯、禅に対する世人の誤解について一言しておきたいと思う。禅というのは、多くの

人の考える如き神秘主義ではない。見性ということは、深く我々の自己の根柢に徹することである。我々の自己は絶対者の自己否定として成立するのである。絶対的一者の自己否定的に、即ち個物的多として、我々の自己が成立するのである。故に我々の自己は根柢的には自己矛盾的存在である。自己が自己自身を知る自覚ということが、自己矛盾である。故に我々の自己は、どこまでも自己の底に自己を越えたものに於いて自己を有つ、自己否定に於いて自己自身を肯定するのである。かかる矛盾的自己同一に徹することを、見性というのである。そこには、深く背理の理というものが把握せられなければならない。禅宗にて公案というものは、これを会得せしむる手段に他ならない。（「場所的論理と宗教的世界観」、『全集』第11巻、445～446頁）

今、見性とは何かの議論にははいりません。ここに西田が、「我々の自己は絶対者の自己否定として成立するのである。絶対的一者の自己否定的に、即ち個物的多として、我々の自己が成立するのである」と言っていることをまず確認したいと思います。ここに絶対者というものに関する独自の洞察があります。

これを受けて、「故に我々の自己は、どこまでも自己の底に自己を越えたものに於いて自己を有つ、自己否定に於いて自己自身を肯定するのである」とあります。自己は自己のみで成立しているのではなく、自己を超えたものにおいて成立するのであり、いわば自己の実相は「超個の個」にあるというわけです。大体同じ事態を描く文章として、もう一つ、挙げておきましょう。

18 かかる絶対者の自己否定に於いて、我々の自己の世界、人間の世界が成立するのである。かかる絶対否定即肯定ということが、神の創造ということである。故に私は仏教的に仏あつて衆生あり、衆生あつて仏あるという。絶対に対する相対ということは、上にも言った如く、単に不完全ということではなくして、否定の意義を有っていなければならない。神と人間との関係は、人間の方からいえば、億劫相別、而須臾不離、尽日相対、而刹那不對、此理人々有之という大燈国師の語が両者の矛盾的自己同一の関係を言い表していると思う。否定即肯定の絶対矛盾的自己同一の世界は、どこまでも逆限定の世界、逆対応の世界でなければならない。神と人間との対立は、どこまでも逆対応的であるのである。（「場所的論理と宗教的世界観」、『全集』第11巻、409頁）

ここに、絶対者を有の立場でとらえず、絶対無として捉える立場があるとともに、個人を見るにしても個のみにおいてでなく、個を超えたものにおいて見るという、西洋の単なる個人主義にとどまらない考え方があります。

西田哲学における個の構造 個は個に対して個

のみならず、そういう個は、ただ一個でも成り立たない、二つだとある一つのものの両極

になりかねず、真の個物はなりたたない。三つ以上の個があつて、その中で初めて個は成立すると言います。ここには、「個は個に対して個である」という命題が認められます。このことについて、西田の言うところを見てみましょう。

まず、個物というものの特質について、再確認しておきます。西田は、個物について、

19 個物は自己自身を限定するものでなければならない、働くものでなければならない、一般を限定する意味を有ったものでなければならない。単に一般的なるものに種差を加え、最後の種を越えてさらにその極限に主語となつて述語とならないものと考えても、それだけにて自己自身を限定する個物というものは考えられるのではない。（『現実世界の論理的構造』、『哲学の根本問題』続編、『全集』第7巻、220頁）

と語っています。

では、いったい、なぜ個物は個物に対して個物なのでしょう。

20 西田は別に、「個物は一般の限定として考えられると共に、逆に個物は一般を限定すると考えられる。しかし単にそれだけにて個物といふものが考えられるのでない。個物は個物に対すると考えられねばならない。個物は唯個物に対することによって個物と考えられるのである。唯一つの個物というものは考えられない」（『弁証法的一般者としての世界』、『哲学の根本問題』続編、『全集』第7巻、306頁）とも説くように、唯一つの個物は考えられないといひます。確かに、ただ一つ個物があるとして、それは何の意味も持たないでしょう。では、二つあるときはどうでしょう。その場合は、「しかし二つの個物の相互限定といふのは、直にこれを翻して一つのものの自己限定と考えることもできるのである。個々なる性質は各相異なると言っても、何物かに属して一つの物の性質たるに過ぎない」（同前、311頁）ということになり、個物の意味はやはり有り得ないことになります。こうして、西田は次のように論じるのです。

21 真の弁証法的限定というべきものは、少くも三つのものの相互限定から考えられねばならない。甲が乙に対すると同じく丙にも対する。乙が甲丙に対し、丙が甲乙に対するも同様である。私が汝に対する如く彼に対する。汝が私に対し、彼が私や汝に対するも同様である。かく三つのものの相互関係を斯く考えるということは、無数の個物を考えるということに外ならない。かくして始めて真に相い独立するものの相互限定、個物と個物との相互限定ということが考えられるのである。（同前、313～314頁）

こうして、一つ前の論に続けては、次のように説くのです。

22……個物は単に自己自身を限定するものではない。個物は唯個物に対して限定せられるのである。真に個物というものが考えられるには、非連続の連続ということがなければなら

ない。互に独立なものの結合ということがなければならない。かくして真に働くことができるのである。そして現実の世界は物と物とが相い働く世界でなければならない。ロゴスの的に実在を考えたギリシャ哲学は、かかる世界を考えることはできなかった。（「現実世界の論理的構造」、『哲学の根本問題』続編、『全集』第7巻、221頁）

では、この個物と個物とがあい対する世界とは、さらにどのような世界なのでしょう。

23……個物は唯個物に対することによって個物となるのである。而も単に一つの個物というものがあるのではなく、そこに非連続の連続というものが考えられねばならない、個物は絶対の否定に面しているのである。個物を否定するものは一般的なものでなければならない、個物は絶対の一般者に対してしているのである。私は汝を認めることによって私である、汝は私を認めることによって汝である。私と汝とは絶対の否定に対してしているのである。しかも絶対の否定は即絶対の肯定でなければならぬ。私と汝とがノエシスの的に相限定するということは、ノエマ的に絶対の否定即肯定的なるものに面するということがなければならぬ、創造的なるものに接するということがなければならぬ。私が汝を認めることによって私である。私が人格的となるということは、創造的なるものに接するということができる。逆に創造的なるものに接すれば接する程、私は人格的となる、即ち私は汝を認めるという意味を有つのである。（「現実世界の論理的構造」、『哲学の根本問題』続編、『全集』第7巻、262～263頁）

自他の個の独立性を確保することは、自己と他者とが絶対に非連続でなければなりません。そこに絶対の否定があります。しかもそのことがあってこそ、自他は結び付くことが出来ます。絶対の否定を通じて、絶対に肯定されてくる。その絶対の否定とは、個々を十全に自由な主体として成立せしめる、絶対者の自己否定を基にしているからでしょう。神が無となるからこそ、そのことにおいて自己も他者も絶対に自由な主体として成立し、自他の間に絶対の非連続が成立すると同時に、だからこそ相互に関係しあうということが現成するわけです。

個の構造から当為へ

この辺を説く文章をもう一つ、掲げてみます。

24 しかし私と汝とは単に相対して相い了解するということによって、私と汝とであるのではない。私が汝を認めることによって私であり、汝が私を認めることによって汝であるというのは、そういうことを意味するのではない、汝が私の存在条件となり、私が汝の存在条件となるということではなければならない。……私が汝を認めることによって私であり、汝が私を認めることによって汝であるということは、私が私自身を否定することによって私であ

り、汝は汝自身を否定することによって汝である、我々は互いに自己否定によって我々であるということを意味していなければならない。そこに当為というものが考えられねばならぬ。絶対に他なるものの結合には当為の意味がなければならぬ。私と汝とが否定によって結合する世界は、単なる共同意識の世界ではなくして、絶対に相反するものの自己同一として主客合一的に自己自身を限定する世界でなければならぬ。従来、表現の世界というのは単に了解の対象界と考えられていたが、表現の内容と考えられるものは単に了解の内容たるのみならず、命令の意味を有っていなければならない、我々に対し客観的当為の意味をも含んだものでなければならない。(同前、271～272 頁)

要は、そうした自他の構造から、我々一人一人は何をすべきかが浮かびあがってくるというのでしょうか。抽象的かもしれませんが、どこまでも他者を人格的に尊重するということが絶対的な命令になってくるということだと思います。いずれにせよ、こうした西田の主張は、大拙が簡潔に、次のように言っていたことを哲学的・論理的に究明したもので、見ている事態は変わらないと思います。

25 自らの価値を尊重するが故に他の(価値)をもまた尊重するということは、自と他とがいずれもより大なるものの中に生きていたとの自覚から出るのである。自と他とはそれより大なるものの中に同等の地位を占めて対立しているのである。より大なるものに包まれているということは、自をそれで否定することである。換言すると、自の否定によりて自はそのより大なるものに生きる。そして兼ねてそこにおいて他と対して立つのである。自に他を見、他に自を見るとき、両者の間に起こる関係が個々の人格の尊重である。仏者はこれを平等即差別、差別即平等の理といっている。(『靈性的日本の建設』、『全集』第9巻、138頁) 再掲

このような自他の論理構造は、西田に言わせれば絶対者の自己否定に基づくものであり、最後の論文「場所的世界観と宗教的世界観」においては、たとえば次のように語られました。

26 神は愛の神でなければならない。キリスト教でも、神は愛から世界を創造したと考えられるが、それは絶対者の自己否定ということであり、即ち神の愛ということではなければならない。これに反し、我々の自己が絶対愛に包まれるということから、真に我々の自己の心の底からというものが出来来るのである。……仏教的に、仏の悲願の世界から、我々の自己の真の当為が出来来ると考えるものである。絶対愛の世界は、互いに鞠【さば】く世界ではない。互に相敬愛し、自他一となつて創造する世界である。この立場に於いては、すべての価値は創造的立場から考えられるのである。創造はいつも愛からでなければならない。愛なくして創造というものはないのである。……かかる立場に於いて、我々の自己

は絶対現在の自己限定として、真に歴史的世界創造的であるのである。「場所的論理と宗教的世界観」、『全集』第11巻、436～437頁）

ここには、絶対の否定に面しているということが、実は神の絶対愛に包まれるという言い方になっており、そこから互に敬愛し、自他一体となって創造するということが生まれてくると言っています。またそこに当為というものがあるのであって、それは正義に基づく倫理ではなく、報恩に基づく倫理であるということなのです。ここに、宗教から現実世界への通路が見いだされると言えるでしょう。

26 以上には、簡単に言えば、個人の自由と主体性を重んじつつ、しかも他の個人への配慮無しに自己は成り立たないというあり方が、理論づけられていると見る事が出来ます。。簡単に言えば、「己立たんと欲せば、人をして立たしめよ」に尽きます。ここに、単なる個人主義でもない、かといって決して全体主義ではない、いわば、

「超個の個」＝人、「個は個に対して個」＝間

として、人間主義的世界観がありますこのような人間観・世界観を共有していくことから、地球社会の新たな秩序の形成を展望することは出来ないでしょうか。このことを具体的にどのように推進し、実現していくかは、今後の課題です。

むすび

今日の複雑に入り組んでいる社会において、単純に東洋・西洋と分けることはむずかしいことでしょう。しかし欧米の人々の考え方において、divide and rule の考え方は、案外、根強く残っているかもしれません。この時に、東洋の考え方を対比して提示することは、グローバルな時代にこそ必要なことでしょう。その際、東洋というと、無とか玄とか、どこかあいまいでとらえどころがないように思われるかも知れません。しかし独特の論理を追究してきた歴史もあるのです。華嚴思想の事事無礙法界は、そのきわめて高度な思想です。

27 その事の背景には、実は唯識思想があります。心と物、主観と客観、を分けず、感覚・知覚の対象は心の中にあるとして、ただ識のみがあると唱えた唯識思想の、その識とは、事そのものです。

その事を大拙は人（にん）としてとらえ、西田は個物としてとらえました。理事無礙法界は、西田の言う「超個の個」、事事無礙法界は、西田の言う「個は個に対して個」です。大拙はこの事事無礙法界に基づいて、戦後日本社会の再構築を目指しました。

前にも申しましたように、西田の最後の論文が、「場所的論理と宗教的世界観」でした。そこでは、「逆対応」と「平常底」がテーマなのですが、これを書き始めた頃、第二次世界大戦の戦争末期、昭和20年3月、西田は大拙に次の手紙を大拙に書き送りました。

28 私は今宗教のことをかいています。大体従来の対象論理の見方では宗教というものは考

えられず、私の矛盾的自己同一の論理即ち即非の論理でなければならないということを明にしたいと思うのです。私は即非の般若的立場から人というもの即ち人格を出したいとおもうのです。そしてそれを現実の歴史的世界と結合したいと思うのです。（鈴木大拙宛昭和20年3月11日付手紙。『全集』第19巻、399頁）

その「場所的論理と宗教的世界観」の論文の中には、次の一節が見えます。

29 我々の自己が自己自身の根柢に徹して絶対者に帰するということは、この現実を離れることではない。かえって歴史的現実の底に徹することである。絶対現在の自己限定として、どこまでも歴史的個となることである。（「場所的論理と宗教的世界観」、『全集』第11巻、423～424頁）

宗教を主題とした論文において、「平常底」を論じる段では、作られて作るものとして、歴史の創造に関わっていくことが強調されました。その次に書こうとしたものが、国家論であったと聞きますが、かなわぬこととなってしまいました。西田は、自らの哲学、宗教哲学から、あるべき国家論を訴えたかったのでしょう。それは、戦争に疲弊する日本への渾身の提言になるはずでした。私は、大拙の『霊性的日本の建設』は、その西田の意思を受け継いだものだったと思うのです。その意図を、戦後75年経った今日、もう一度、再認識し、現代の国際社会に生かしていくことはとても重要なことだと思うのです。効率主義・業績主義一辺倒の、競争社会となった、多くの問題をかかえる現代社会において、自己の存在、人間という存在の意義を深く自覚しつつ、自他のあるべき関係を創造していけるような主体の実現、すなわち自由の実現を、どのように展望していくかは、緊要の課題だと思います。このとき、大拙や西田が提示していた人間観から出発することにおいて、地球社会の新秩序の形成を導き出せないでしょうか。

以上、大変抽象的なお話で恐縮ですが、ご清聴、誠にありがとうございました。

藤山：先生、大変ありがとうございました。非常に面白かったです。ただ、西田さん、鈴木さんの、幾分かでも文章に親しんでないと、やっぱり難しいは難しい。

竹村：やっぱり西田は難しいですね。ごめんなさい。私も分かってないところがあります。

藤山：でも非常に面白くて。まず個人的なことを言わせていただくと、3年くらい前に、ベルギーの女性の物理学者兼哲学者で、その人が英語で一生懸命、力説してた概念の中に、要するにデータベースが全部出来上がってしまう。それが神になってしまっ、個っていうも

のが消滅してしまうと。それを人間存在して救うためには、個と個が連携をした関係そのものに注目しなきゃいけない。マイセルフとかヒムセルフはなくなるんだけど、ユアセルフもなくなるんだけど、リレーションだけが残ると。リレーションセルフっていう言葉をつかって、それがこれからの人間性復権のもとではないかって言うおばさんがいたんですね。哲学者のニコールさんっていう人だったんだけど。これ、事事無礙法界ですね。

竹村：そうですね。ただ、その『事』っていうものをやっぱりもうちょっと主体性とかクリエイティビティーとか、そういうところで捉えたいところですね。全体主義になったらちょっと困りますからね。

藤山：ですから、彼女はアンナ・ハーレントの弟子でもあって。彼女は自分が考えた世界っていうのが、全体主義に自分が近づいたんじゃないかと思って、恐れているっていう言い方を自分でしてましたね。すいません、余計な話をしました。それでは、ちょっと助走だけつけて、お休みにしたいと思うので、どなたか感想なり、先生に対する質問なり、2人ぐらい聞いた後に休憩を入れたいと思います。いかがでしょうか。われと思わん人は挙手を願いたいと思います。よろしくお願いします。竹吉さん、よろしいですか。

竹吉：はい。竹村先生、ありがとうございました。まず、冒頭のグローバル人材の定義というのが、大学の中でもろもろ話されている中で、民間企業の中で、グローバル人材の定義ってなかなか定められないんですね。いろいろ調べてる中でも、やっぱりいわゆる官庁といいますか、政府の中ではこういう人を推進していくっていうのを定めてる一方で、民間っていうのは定められない。なぜなら、グローバル人材の定義っていうのは刻々と変化しているっていうのはあるので。一回定めると、毎年変えるのは面倒くさいので、定めないっていうのも一方であるので。その辺りを今後、弊社としてもどうしていこうものかなと。グローバルっていう言葉だけが進んでいって、人材っていうのを定義できないっていう悩みを抱えてる中で、その辺りってどうお考えなのかなと。

いわゆる、学生をどう輩出していこうかなっていうところで、どう民間に輩出していくのかっていうお考えをおひとつお聞かせいただきたいのと、あと、勝手な理解なんですけども、もう一つが、宗教というのが時代の流れとか経済の発展に伴わないで、不変的な考えとして、時代の流れにそぐわない形で、ある意味、変化しない、不変の真理として脈々と受け継がれているのかなという中で、どう東洋宗教っていうものが進化とか、考え方が変化してきたのかっていうのを、きょうの中で、私の中で理解できなかった部分があったので、竹村先生の中で、このグローバリゼーションの中で、例えば考え方がどう変わってきたのかっていうのが教えていただけると。グローバル人材の定義っていうところの一つと、あと、不変的な真理の中にある宗教哲学という中の、変化と進化っていうところをお聞かせいただけると、非常にありがたいなと思っています。よろしくお願いします。

竹村：最初、ご紹介したのは、主に文科省とか内閣府、総理府ですかね。その辺の審議会で、もんで、出てきた答申みたいな、そういうものですよね。そこには結構、民間の経済界のかたがたが入っていて。自分たちがこういう人材が欲しいんだっていう、そういう意見がかなり盛り込まれてるだろうと思うんですね。そういう意味では、決して大学が象牙の塔の中で勝手に考えたものではなくて、むしろ社会の側から求められている人材像だったと思います。それは確かにますます変化していくっていう点もあるでしょうけれども、基本的なところはそんなに変わらない可能性があるわけですし、それぞれの企業の業種とか行き先とか、それに伴って経験を積んで、こういう人材をやっぱり育てていかなければいけないなど。それはむしろ、やっぱりそれぞれの企業の中で考えていかざるを得ないんじゃないかなというふうに思いますけどね。

それから、宗教というか、特に哲学とか人間の心とか、そういうものは確かにあんまり変化しないんですよね。むしろ、不易と流行と言うけれども、変わらない部分を語ってきたというところはあると思います。しかし、仏教史という歴史を見ても、やはり華嚴の考え方が出てくるのは、唐の時代あたりです。それまでに唯識とか中観とか、いろんな考え方があって、それらを統合して生まれているわけですよね。だから、ある程度の進化の中で、そういう世界観が語られてきたということはあるんですが、しかし、日本をとってみても、鎌倉時代にある程度、宗派ができて、それ以上、ほとんど新しい宗派はできてませんし、できたとしても、思想的、文化的にインパクトのあるものができたわけではなくて。ある意味では、完成してしまってるのかもしれないですね。

華嚴からもう一つ進むとすると、私は密教じゃないかなというふうに思ってます。空海の曼陀羅の思想とか、その辺はさらに進めた部分があるんじゃないかなと思いますけれども、なかなかそれ以上、さらに変わるとか進むっていうのは、果たしてあり得るのかなっていうのが私の感想です。ただ、それを時代に合わせてどのように表現していくか、説明していくか、そして訴えていくかですね。それはやはりその時代、その時代の在り方があっていいんだろうというふうに思います。それはあまりなされてないのが実情じゃないかなというふうには思いますけどね。

竹吉：ありがとうございます。非常に、きょうお話しいただいたところの、その当時、語られてる言葉を現代解釈に、現代の言葉に置き換えられない、イコール、現代に理解できない部分が多いのかなって部分があってですね。非常に、きょう聞いてて、頭の中でどう置き換えられたらいいんだって、一民間人として分からない部分も多くてですね。その部分で伝え切れてない部分っていうか、進化し切れてない、変化し切れてない部分があるのかなってちょっと思ってますね。時代の変化にどうそこが合わせていくのかなっていうところが、不変の真理と時代の変化っていうところのギャップっていうのが生まれていってしまうのかなって、多少、思っていました。

竹村：そうですね。

竹吉：ありがとうございます。

藤山：竹吉さんのご質問も、果敢に挑んでいただいた感じで非常によかったと思います。他に、あと1人ぐらい、どなたか。川名先生、お願いします。

川名：先生、ありがとうございました。東京工業大学の川名と申します。私の専門は国際関係論、国際政治学なんです。ですから、きょうの先生のお話にありました、『間』ですよね。間について、やっぱりずっと関心を持ってきていまして。今回、あらためて西田幾多郎の『善の研究』を読んで、やっぱり難しいなっていう思いは変わらないんですけども、何となく、学生の頃読んだときよりは、例えば絶対矛盾的自己同一とか、当時はもう、はてな、はてな、だったんですけども。要は、これは再帰性のお話をしてるのだとか、今風の言葉に置き換えながら、ちょっとは自分の成長を感じられたかな、なんて思いながら読んでました。

それで、質問というか、まず私の感じたことは、私は日米関係とかが特に専門で見てるんですけども、関係っていっても、結局のところは日本を見て、アメリカを見て、そこから観察されるもの、例えば経済力とか軍事力の量とか質の問題から、この両国の関係を見ようっていうふうに、この領域ではそういうアプローチというのが主流なんですけれども。それはまさに先生のおっしゃってるような要素還元主義にすぎなくて、デジタル思考的なんですね。ですから、日本でもなくてアメリカでもない、日本とアメリカの間にあるもの。それが何なのかっていうことが分からない限りは、多分、日米関係っていうものも永遠に理解できないんだろうと思っていて。それは多分、国際関係論で今、抱えている最も深刻な問題だろうというふうに、あらためて感じました。ですから一部では、その間にあるものは何なのかっていうことで、例えばその時間的要素みたいなものを入れながら、アメリカでもない、日本でもないみたいなものの正体を暴こうということをやってるんですけども、まだまだその途上ということで、私も問題意識を新たにすることができて、大変感謝をしております。

質問も非常にしょうもない質問なんですけれども、先生の最後の結論のところで、人間という言葉が出てきていて。ふと思ったのは、人と人間というのは違うんだろかっていうことですね。わざわざ『間』という言葉を入れるのが『人間』ですし、それを取って、『人』という表現の場合もあるわけですね。それは哲学的にどういうふうに考えればいいのかっていうのが一つ目です。それから、もう一つは、私は西田幾多郎の文章を読んでいて、いつも思うのは、なぜ彼は『でなければならない』という表現を使うのかということですね。つまり、『 $2+3=5$ でなければならない』っていうことは誰も言わないわけで、『である』で済むはずなのに、彼は、きょう先生にご紹介いただいた文章でもそうですけれど、『でなければならない』というふうに表現するんですよ。それっていうのは、一体どういうふうに理

解したらいいのだろうか。こういうことを教えていただきたい。この2点、お願いいたします。

竹村：コメントありがとうございました。一つ、『間』の問題ですけども、やっぱり個は個だけでは成り立たないと。あくまでも、個は個に対して個だと。これは西田の言い方ですけども、やっぱりそこを見ていくべきじゃないかなと思うんですね。だけど、個は個に対して個って、関係の中にあるんですけども、それぞれが自由な存在、個個円成で、自由な主体そのもの。しかも、結び付いていると。そういう在り方でなければならないわけですね。誰かに従属するような関係性であってはならないわけでありまして。かといって、唯一の個ってというのは成り立たないと。そこからやっぱり人間、人間存在という言い方は十分意味があると思います。和辻哲郎は間柄存在から倫理っていうものを導き出したと思うんですけども、やはり人を見るときに、個を見つめるっていうことも重要ですけども、それから個を超えたものへのまなざしも重要で。と同時に、やっぱり他者っていう問題を真剣に考えなければいけないと。そういう意味では、『間』っていうものは非常に重要な問題だろうと思いますね。

『でなければならない』っていうのは、私は西田じゃないからよく分かりませんが、やっぱり西田は哲学者で、哲学を論理的でなければならないと思ってたと思います。西田は。あくまでも、例えば日本人のものの見方、考え方、感じ方。これに論理の形を与えるんだと。これは西田が自分の使命として考えていたことですね。その論理的な正しさを保証するために、論理的にはこうならざるを得ないとか、こうでなければならないって、そういう思いがあって、そういう表現を多用したのではないかなと、そんなふうに推測します。

川名：どうもありがとうございます。

藤山：『人間』っていうのは、誰がつくった言葉なんでしたっけね。

竹村：人間は、仏教には『六道輪廻』ってありますよね。六趣輪廻。地獄、餓鬼、畜生、修羅。これ、本当は『じんかん』か『にんかん』かもしれませんが、『天上』と。少なくとも、仏教には古くからそういう、人間という言葉はありますね。それが初出、中国古典のほうで別途、別のソースであるかどうか、それは私は知りませんが、かなり古い時代から、仏教では人間っていうことが言われていると思います。

藤山：現代中国人にこの『人間』っていうのを見せると、完全に違う意味で。これ、人の世っていう意味なんですよ。世間ではっていう感じなんですよ。

竹村：なるほど。

藤山：だから、人間を意味しないで、世間っていう感じなんです。むしろ。だから、仏教用語だったんだけど、普通の現代中国人はもう分かんなくなっちゃってると。日本人が転用して使ったと、こういう感じなんですかね。

竹村：仏教の人間が、むしろ世間かも分かんないですね。ある意味では。よく分かりませんが。

藤山：分かりました。ありがとうございました。先ほど、佐藤さんも手を挙げてたので。佐藤さんのお話で、トイレ休憩にしたいと思います。どうぞ。

佐藤：ありがとうございます。竹村先生、大変ごぶさたしております。

竹村：ごぶさた。いろいろお世話になりました、ありがとうございました。

佐藤：とんでもないです。お世話になりました。当時、グローバル人材、一生懸命、進めていた人間なので、最初に冒頭出てきて、びっくりしました。ありがとうございます。きょう、まさに米中関係とか日中関係、先ほどの川名先生のご質問にもちょっと関係するんですけども、お話伺って、すごく思ったのは、アメリカっていうのはまさに二国主義、主客二元論的な形で、保護貿易主義なんかもそうですけど、バイでいろんなことを主張してくる。一方では、中国について、きょう質問したいんですけど、日本っていうのは、まさにどちらかっていうと関係主義的な中で、人間主義的世界観を大事にしなきゃいけないっていうお話があったと思うんですけども、今後、米中関係がいろいろ厳しくなる可能性が、さらに加速していく可能性がある中において、日本としてどういうスタンスをとるべきか。中国とどう、僕は個人的には、間をとれるような日本であるべきだと。どちらかに極端に片寄ることではなくて、というべきだと思うんですけど。そのときに、こういった価値観なり、世界観というのをどういうふうに出していくと、それぞれといい関係性というのをつくっていけるのかっていう辺りっていうのを、きょうお話伺いながら、すごく悩んだところなんですけれども。その辺って、先生的に、ご覧になって、思われるところってあるんでしょうか。よろしくお願いします。

竹村：私、国際関係とか現代の政治とか、ほとんど疎くて分かりませんが。私がちょっと単純なのかもしれませんが、一つ思うのは、やっぱり安全保障という問題は、これは危うくしてはならないだろうと。だから、やっぱりどこかでアメリカの言いなりにならざるを得ないのが残念だけれども、日本じゃないかなという気はします。その中でどういうふう

立ち回るかっていうことだと思いますが。手放して中国と協調できるのかどうかですね。もう一つは、やっぱり人権問題とか自由の問題っていうのは憂慮すべきものが僕はあると思うので。香港なんか、本当に僕はやっぱり関係ないと思ってるんだけど、怒りを感じますよね。この世に関係ないと僕は思ってるんだけど、怒りを感じますよね。そういう意味で、中国を許せるのかっていうのを個人的には感じますね。ウイグルとかチベットとか、そういう問題もあります。だから、中国人は非常に僕は実利的だと思います。ものすごい実利的で現世的で、あまり超越的なものを考えないし。そういう中で、日本がどれだけうまく立ち回れるかなというところじゃないでしょうかね。

藤山：ありがとうございました。このテーマである市場原理についても、共産党が上にあって、市場をいつでも閉鎖できる形として、分配機能としてだけ使ってるわけですね。民主主義に至っては、全く民主主義はコロナを制圧できなかったっていう論争を挑んでるぐらいなので、あってないとか。じゃあ自然科学はきちんと受け入れたじゃないかって言うんですけども、これも実は今、JST なんかで問題になってるのは、リサーチ・インテグリティですね。要するに、研究の公正さに対して、国家が介入をしてくる世界を常態としてつくってしまったということに対しては、かなりスタンダードと違うわけで。これは非常に難しい問題を惹起してしまったと。

しかも今の中国は、その問題を既に、今までは、自分の国は特殊な治め方をするんだという言い方をしてたのが、いや、こっちのやり方のほうが正しいんじゃないのっていう、そういうグローバリズムの基本をこっちに戻したっていいんだぜっていうような感覚を表に出し始めてるっていうのが、このコロナの機を利用しているところなんで、ここの先はかなり対立が激しいのかなという感じもします。もっとも、その対立を誘導している今の政権自体が変わってくれるっていうこともあるのかもしれませんが。ありがとうございました。それじゃ、ちょっとここで休憩をしたいと思います。5 分か 7 分か、休憩をいたします。よろしく願いいたします。

<休憩>

藤山：どれくらい戻られているかな。大丈夫かな。えっと、いきなり 3 人の方から深い見解と質問がなされて、良いスタートだと思うのですが。その他、挙手をお願いいたします。

梅原：JST CRDS の梅原と申します。仕事では、シンクタンクの業務をしております。科学技術といろいろな、人文社会科学も含めた、トータルなことを俯瞰的に考えるって、そん

な仕事を今、してるんですけれども。ちょっと二つ、1個は感想で、もう1個が質問になるんですが。1個は私、もともと、実はライフサイエンスの研究をしていたときに、すごく還元主義的なものをずっと感じていたんですね。一つ一つの分子と呼ばれる、ものすごく小さなところまで、パーツまで分解をして、そのメカニズムを探るっていうようなアプローチがあったんですけど、逆に多分、総体として、システムとして捉えるっていう考え方も、非常に起こってきた時代でして。ちょうどそこが、何となくきょうのお話っていうか、関係性っていうか、一個一個分割するんじゃなくて、トータルに捉えてると、非常に共通するところがあったなと。それが一つ、感想でした。

質問のほうは、ちょっとレベル落ちちゃうかもしれないんですけど、冒頭のほうにあった、自文化理解というのが非常に大事だという点。異文化だけじゃなくて、自文化が。非常に私も、実は共感しました。アメリカに4年間いたときに、やはり自分たちがどういう文化に根付いてるかって説明する機会が非常に多かったときに、宗教の話ってなかなか難しかったんです。ですので、大拙の歩みなんか学んで、すごいなと本当に思ったんですけれども。このときに、日本っていうものと東洋っていうものを同一視していいのかなっていうことも考えたんですね。きょうのお話は、西洋に対する東洋っていう文脈が非常に多かったと思うんですけれども、東洋の中の多様性っていうところで、ちょっと質問させていただきたいなと思って。

実は、先ほど中国の話したときも、中国は結構、もう違うスタンダードっていうこともあったんですが、仏教っていうものを恐らくルーツにするという意味では、ある程度、共通の部分あると思うんですけれども、日本と東洋の違いについて教えていただければと思いますが、よろしいでしょうか。

竹村: まず東洋をどこまで考えるかという話がありますよね。東洋をオリエントと言った場合はエジプトまで入るとか、かなり広範囲になりますし、謙譲の美德が分かるのはミャンマーぐらいまでだとか、そういう話もありますし。インドは、サンスクリットなんかはインド・ヨーロッパ語族で、どっちかっていうとヨーロッパに近いかも分からないんですね。釈尊は、むしろインドでは異端かもしれません。それはともかくとして、東洋をどの範囲にするかっていうこともあります。やはり多様性はあると思います。東南アジアは大体、上座部仏教というものが文化を形成しているかと思いますが、共通のものもあるかと思いますが、それぞれやっぱり違いもあるでしょう。特に日本の場合は島国で、陸続きではありませんので、非常に外来の文化、あるいは自ら大陸へ行ったりなんかして、摂取して。だけど、それを日本の中で育てていくと。その中で、日本独自のものを培ってきたという部分はあると思います。

きょうは東洋、日本、何ていうか、大ざっぱに話してしまいましたが、特に大拙の華嚴を中心にお話をさせていただきましたけれども、華嚴だけが東洋だと言うつもりはありませんし、かなり高度な思想だとは思いますが、それだけではもちろんない。日本

には日本独特の感覚っていうか、あるいは哲学っていいですか、そういうものがやはりあると思います。『靈性的日本の建設』の前に書いた、『日本的靈性』という書物があります。鈴木大拙の『日本的靈性』。これはほとんど、法然、親鸞さんの浄土教を描いているんですね。日本の浄土教っていうのは、念仏したら救われるとか、何か善を实践して、その上で救われるっていうんじゃないくて、この身このまま、絶対者の慈悲の中で救われていくと。この身このまま。これはインドにも中国にもないと。それで日本的靈性っていうことを大拙は言っています。確かにそういう独自性っていうか、そういうものはあるわけでありまして、もっと細かく見ていけば、おっしゃるように、それぞれの文化の多様性はあると思います。

藤山：よろしいでしょうか。では磯部さん、お願いします。

磯部：日産自動車の磯部です。本日は非常に興味深いご講義、ありがとうございました。きょう挙げたもの、今まさに、梅原さんが質問されたことと全く同じことを私、質問しようとしておりまして。そもそも本日のテーマが『東洋・日本思想の独自性』というところから、やはり東洋思想と日本思想の違いというものはそもそも何なのかなということをまさに質問しようとしていたところで、今、お答えいただいたんですけど。私も仏教そのものが、先ほどご紹介あったように、唐の時代であるとか、空海や最澄が輸入してきたものという認識なんですけど、一方で、中国そのものが中華思想という、rule and divideの最たるものだと思うんですけど、なぜそういう国から、今回の仏教というか華嚴というか、そこを日本人が学び取ってきたのかっていうことをまさに質問しようと。さらに、それを昇華させたのはやっぱり日本独自なのかなっていうことをお伺いしたかったんですけど。まさにウメハラさんと同じような質問になっちゃって、恐縮です。

竹村：やっぱり昔は、仏教っていうのは学問そのものですよ。あるいは文明っていいですか、文化っていいですか。先端の文明を摂取して、国威を発揚するっていいですか、聖徳太子なんかもそういうところがあったわけでありまして。やはり大陸に学ぶということにならざるを得なかっただろうと思いますね。そういうものを取り入れてきたわけですけども、鎌倉時代には、本当に民衆がそれで救われるっていうような論理とか世界観ではなくて、信仰っていいですか、念仏をすれば救われるとか、題目を唱えれば救われる、こういったものはみんな日本の仏教ですね。日本独自に現れた仏教です。だから、いろいろ学んで、高度な文明、思想、哲学を学びながら、その中で日本人としてどう救われていくか。あるいは、世界をどう見ていくか。それを育んできたということになるだろうと思います。

きょうはその華嚴そのままの話でしたから、そういう、日本で独自に育ったっていうことではないんですが、大拙という稀有な存在が、あの時代にアメリカに十数年いて、帰ってきて、そして東洋と西洋を対比しながら、いろいろ論じたと。その辺は近代日本の一つの事象だと思いますし、西田のほうは、自分で一生懸命考えて、あそこまで達したわけですね。だ

から、これは日本の思想ですね。今、思い付きですけれども、東洋の華嚴思想、そして、それに接続するのが西田の哲学。それで『東洋・日本』と。そういうふうに受け止めていただけるとよろしいんじゃないかなと。その間には、共通のものがあったということですね。だけど、これだけが東洋・日本の思想というわけではないです。

藤山: ありがとうございます。アジアがどこからなんだろうかという話も最初出ましたが、岡倉天心なんかも、『アジアは一つである』って言うときに、アジアはどこだとかってよく論争されたりもしますけども。私は情緒的に言うと、パンジャブあたりが境かなと思ってるとっていうのは、音楽を聴いてると、どっちかっていうと、日本の演歌のこぶしみたいなものがある、通用するのがちょうどあの辺までで。ミャンマーの向こうぐらいまでですね。今のバングラデシュぐらいまで。その向こうに行くと、そういうのがなくなるっていう感じを私は持ってます。あんまり大した話じゃないですが。それでは星野さん、お願いします。

星野: ENEOS の星野と申します。私自身は研究を常にやっている人間ではあるんですけども、きょう、非常に宗教の話というか、東洋の禅とか、そういった話を聞かせていただき、これまでほとんど勉強してこなかったところもあって、非常に新鮮でありながら、いろんな視座を考える考え方というか、そういうところを与えていただいて、これから考えていかなきゃいけないかなというところで考えております。そういった浅い知識であり、浅い理解の中で質問というところで、私自身はチャレンジングではあるんですけども。東洋の考えの中で、個と個の間に価値があるというか、それ自身が存在意義であるというか、存在であるといったところで、一方で、西洋が分けて制するといったところで、家族であったり国家であったり、集団をつくるといったところが個と個の関係を減らすっていうところになるのかなっていうふうに思っています。

一方で、東洋でも、国家だったり、当然、集団だったり、いろんなものを東洋でもつくるというところがある中で、東洋のものの考えの中で、国家とか集団っていうのは、どういう捉え方をされているのか。そうやって分けて、一グループをつくるっていうこと自体が否定的に捉えられるようなものなのか、その辺りをお伺いしたいなというふうに思っています。

竹村: 本当の自由っていうのは、自分の自我の思いとか、自分の利益を図ろうとか、そういうことをコントロールできる、それから自由であるっていう。自分の煩惱といいますか、欲望といいますか、それから自由であるというのが本当の自由だというようなことを大拙は言っていましたよね。ということは、他者との関係を適切に立ち直していく、そういう主体となるっていうことが本当の自由なんだと。そういう考え方が、大拙の場合、あるいは西田もそうだと思いますが、根本にあったと思います。だから、主体性とか自由っていうことを論じるからといって、ただ個だけの立場ということを使うのではなくて、むしろ他者を立

ててこそ、自分も立つという、そこを根本に考えていく。そこから出発したときに、いろんな集団というものはあり得ると思います。いろんな集団の違い、レベルっていうものがあるって、それぞれをそれぞれ適切に秩序立てていかなければいけない。理念的にはそういうことになると思いますね。

国家は国家としての、ある一つの形というものを当然、持たなければいけない。大拙は、そのときに民衆を上から押さえ付けるのではなくて、みんなが対等な立場で、天皇もその中の1人にすぎないと。ただし、国の統合の象徴といいますか、中心におられるっていうのはいいでしょう。だけど、みんな一緒ですよ。そういう形で、国家の形っていうものを考えようとしたんだろうと思うんですね。具体的にどういうふうについていうことは、私はなかなか言えませんが、やはりそれぞれの家族なり、地域なり、国なり、今はやはりグローバルな、地球市民という立場も考えなきゃいけないでしょう。それぞれの立場でどうあるべきかっていうものを、やっぱり追求していかなければいけないだろうと。そこまでしか言えませんが、そんなふうに思いますけど。

藤山：星野さん、よろしいでしょうか。それでは次、吉田さん、お願いします。

吉田：東芝の吉田です。きょうは貴重なご講義、ありがとうございました。正直に感想を申し上げますと、やっぱり難しい。とても分かりにくいというのが正直な感想ではあったんですけども、その中で自分なりに一生懸命考えてみたことと、それに関して質問というのを述べさせていただきたいと思います。私自身は東芝の研究所という所で、いろんな社会問題を、数学だったり科学だったり、そういったものに置き換えつつ、それで深い理解をしようって、そういうことをトライしてるっていうふうに見えるかなというふうに思うんですね。ただ、私、キリスト教については十分分かってないですけども、科学とか数学を通じて、要素還元主義であるとか、主格二元論ということをやったときに、そういうことかなって何となく腹落ちする部分っていうのはあります。

ここの講義、別の講義ですけども、科学っていうのは、アイザック・ニュートンがキリスト教を信仰する中で、その中の摂理、道理みたいなものを説明する手段として、科学っていうものが生まれてきたっていうふうな歴史を学んできました。この科学の力っていうのは、ある意味、キリスト教を理解する一つの表現手段であったり、発信手段であったりするんじゃないかなというふうに思いました。一方で、仏教に当たる科学に対応するものっていうのは、あるのかなのか。それを考える必要があるのか。そもそも考えること自体が東洋的思想から反するものなのか。それとも、アイザック・ニュートンのような天才的な人が現れなかったから、今はそれができてないのか。その辺のところについて、先生のお考えをお聞かせいただけるとありがたいなというふうに思います。

竹村：仏教の中にも、対象を分析して、細かく分けて、ある意味でその要素というのを見いだしていく、そういう分野もあります。アビダルマという言葉がありまして、お聞きになったことがあまりないかもしれませんが、ダルマっていうのはいろんな意味ではあるんですけども、世界の構成要素ですね。これを分析していくっていう分野が仏教の中にきちんとあるんですね。それで、小乗仏教といいますか、部派仏教の有力な部派の『説一切有部』っていうところでは、五位七十五法、五つの範疇の、75 のダルマっていうものを分析しました。唯識思想っていうのは大乘仏教なんですけれども、唯識では五位百法、100 のダルマを分析しました。そういう、どんなに変化しても自分自身を保ち続けるものという意味で、ダルマなんですね。ダルマはいろんな意味がありますが、この場合の七十五法とか百法っていう、法っていうのは、世界がどんどん変化していくんだけど、その中で自分自身を保つもの。それは何か。それで分析していくわけで、ある種、科学的な手法はある。ただ、それは自然界だけに向けられてるのではなくて、むしろ心の世界の分析に比重があります。例えば、煩惱とは何か。むさぼりだ、怒りだ、何だかんだ、ものすごい細かく分類してます。

それに対して、善の心。善悪の善ですね。善の心はどういうものか。これも幾つも分析しております。どうも仏教は、やはり自分の心の世界といいますか、その分析のほうに関心があって、自然界、外界への関心があまりなかった。これが西洋と別れてくる一つの道だったんじゃないかなと。全く要素還元主義的なアプローチっていうものがないわけではないんですね。だけど、それをを用いながら、いかに心を清めていくかというか、何ていうか、そういう方向に向いちゃったんですね。その辺が違いなのかなという気はしますけど。

吉田：なるほど。

藤山：吉田さん、還元主義は初めに、(#####@01:57:53)って聖書が始まるっていうところで、既にかかなりあると思うんですけど、科学に関しては、最近の研究っていうので、キリスト教が科学の生み出した母体であるっていうことが非常に関係があったということはいわれているんですね。それは例えば、旧約聖書の一番最初、これはユダヤ教ですけども、要するに、自然は世の中、森羅万象、全部神がつくるわけですね。そうすると、この世っていうのは神がつくった後なんで、全部意図があるはずなんですよ。ですから、自然を研究するっていうことは、神の創造の意図を知ることなんですよ。それは無償の行為として、信仰の延長の中で自然を調べることができる。

ニュートンは、その頃科学者っていう言葉はないので、scientist っていう言葉はないですよ。18 世紀か 19 世紀の言葉ですから。そうすると、彼は自分のことを何て言ってたかっていうと、自然神学者って言ってた。そうすると彼は、実はカタリ派っていう、南仏にあった宗教の異端が、キリスト教の異端が、この世は悪で、極楽の世界が善だと。だからこの世は悪だって言ってたのは、カトリックは許せなくて、むしろ自然科学を奨励してた時期があるんですね。ニュートンなんかも、それと兼ね合ってるんですね。ところが、発見される

ものが、聖書と違うことを言いだして、やばい、やばいって。こういうところから関係をしてくると。

でも、中国では四大技術の発明がある。技術の発明っていうのは世界中で起こってる。でも、それは科学にまでいかなかったっていうのは、技術の裏にあってお金にならない部分はどうしてもいいわけですね。お金になることについては、ちゃんと管理していかなきゃいけないので。洋の東西を問わず、発明は行われてる。だけど、要するに科学っていうのは、事実が異なった世界の裏の理屈まで調べたいっていうことです。そこまではなかなかいかなかった。これはリン・ホワイトっていう人が、『機械と神』っていう中で、その辺のことを解き明かして。最初は何言ってるんだっていわれてたんですけど、今はかなり、科学がどうして西洋で生まれたかっていうのに、キリスト教が深く関係してるっていうのが定説になりつつあると。すいません、余計な話をしました。

吉田：ありがとうございました。

藤山：その次、荻野さん、お願いします。

荻野：ありがとうございました。実は、お聞きしたかったことの 하나가、なぜ西洋では自然科学者が哲学者を兼ねることが多いのに、日本ではそうになってないのかということだったので、お答えいただきまして、ありがとうございました。それから、あと二つほどあります。一つは、文化的多様性ということに対して、どういうふうに仏教を哲学で考えられているのか。宗教の中でも多分、最も異端に対して鷹揚なものの一つではないかと思います。それに対して、非常に異端を許さない、キリスト教もそうですし、イスラムなんかもそうだと思うんですけども、そういったものとの関係性。先生、最初に宗教者の集まりの話をされたときに、協力し合えるところで協力しようっていうことをおっしゃられたと思うんですけども、その辺のところを具体的に、どんなふうに多様性を容認しながら活動されてるのかというのを、ひとつお聞きしたいと思います。

それから、もう一つは競争の考え方で。やっぱり競争社会っていうのも、結構、還元主義的な発想の社会だと思うんですが。正直、私みたいなビジネスマンは、結構、還元主義的な頭があるので、基本的には機会が平等であって、差別がなければ、競争そのものは対等なことじゃないかと思ってるんですけども。その辺が、仏教哲学とどの程度、相いれるものなのかっていうのと、2点、ご教授願えればと思います。本日はありがとうございます。

藤山：お願いします。

竹村：仏教者の中に科学者はいなかったとも、言えないかもしれない。その1人は空海。空海、科学者とは言えないかもしれませんが、例えば満濃池っていう、これ実は池っていうけ

れども、せき止め湖ですよ。これの修築を誰も成功しなかったのが、空海がアーチ型の防波堤みたいなのを造って、うまくせき止め湖を造ったと。アーチ形を考え出すんで、何か科学的な勉強もしてきたのかなと思うようなところがあります。万能の人ですね。湯川秀樹なんかは、ダビンチですかね。ミケランジェロですかね。それよりも上だ、ぐらいに言うような人もいないわけではありません。

それで、多様性の問題ですけども、仏教は寛容だっていうイメージが割合、強いかと思いますが、仏教もいろいろでありまして。特にインドなんかではさかんに論争してますし、それから日本でも、自分のところだけが正しいと。他は邪教だというようなことを言う仏教も、全然ないわけではないですよ。そういう意味では、それこそ空海。この空海のメインの著書は『秘密曼荼羅十住心論』という書物ですが、簡略してあるのが『秘蔵宝鑰』ですね。これは人間の浅い心から深い心へといえますか、10段階に心の段階を分けて、それに対応する宗派、仏教の考え方。最初は小乗、声聞乗、縁覚乗、それから唯識、中観派、天台、華嚴、そして密教とか、体系化してるんですね。けども、それぞれ意味がありますよ。密教だけが正しくて、他は全て間違ってますよとか、意味がないですよとは言わないですね。それぞれ能力に応じた教えであって、それぞれそういう意味があるんだと。さらには、それぞれが絶対なんだというようなことも言いだしております。そういう原理を考え出す源が、例えば空海とか、華嚴もそういうことを言うんですね。そういう思想の中にはあり得ました。だから、一概に仏教は多様性を認めてるとも言い切れないんですけども、確かにそういう面がありますね。

それから、日本人の国民性っていうのが比較的、他に比べると寛容なんじゃないかなという気はしますけど。『分け登る麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな』みたいな、昔から、道は違って同じ所へ行くんですよ、みたいな感覚っていいですか、そういうものが日本人の国民性には根付いていて。そういうものが、日本仏教の寛容性を支えているというようなことがあるんじゃないかなという気がしますけど。

最後は何でしたかね。競争主義。競争主義についてどう考えるかっていうことですが、仏教そのものは、そういう問題に直接には何も発言してないと思うんですよ。だから、そう簡単には出てきませんけれども、健全な競争っていうか、切磋琢磨って言い換えますかね。そういうことは本当に必要だろうと思います。ただ、競争に勝って、負けた者はもう去ればいいのか、そういうことではあまり人間的な社会とは言えないと思いますね。やっぱり相互扶助っていうか、弱い人には弱い人に対する何らかの配慮といえますか、ハンディを持っている人にはハンディに対する配慮といえますか、そういうことが全体に考えられたような社会をつくっていくっていうのが、仏教的にも、そういうことなんじゃないかなというふうに思いますけど。

藤山：よろしいでしょうか。

荻野：ありがとうございました。

藤山：小原さん、ちょっとお願いしたいんですけども。オブザーバーの方、パネルのほうに全て招待をしていただけますか。きょうはきちんと時間がありそうなので、お願いをします。それでは、次は齋藤さん、お願いいたします。

齋藤：どうもありがとうございます。日産自動車の齋藤と申します。私も小石川高校の卒業生でございます。

竹村：そうですか。

齋藤：本駒込あたりの風景を思い出しながら伺っておりました。非常に、ちゃんと理解をするのは難しいというのは、皆さんがおっしゃってるのと一緒になんですけども、私なりにあらためて感じたことを述べさせていただいて、少し質問があります。確かに今、企業の中でのいろんな効率だとか、しかもグローバルな関係性の中で活動していると、確かにその divide and rule の世界、いろんなものを要素に分解して、どうやって解決策を見いだして、それを場合によっては、強制的にガバナンスを効かせていくという、そういう世界観がどうしても存在しているのは事実だと思ってはいます。ただ、一方で、例えばフランス人やアメリカ人、イギリス人、いろんな所で会話をしていると、目指したい世界観は、実はそんなに違わないのではないかなというのを感じるところがありますし、例えばラーニング・オーガニゼーションみたいな考え方だと、社会構成主義的な考え方というか、必ずしも全てを分断していくのではなくて、しかも関係性の中において、物事の意味を成していくというようなことは、確かに西洋の、欧米の中にもだんだん根付きつつあるのかなと思っています。

もう一つ、個人的には、以前、マルティン・ブーバーの『我と汝』を読んだときに、これは難しくてよく分かんないなと思って読んでたんですけども、きょう、あらためて先生のお話を伺って、われとそれではなくて、われとなんじという、その関係性の中において、初めてわれが成すというか、ビーイングというか、われがあるみたいな、そういう考え。唯識だとか華嚴だとか、それだけでは私自身も理解がなかなかできませんでしたが、そういうのが有機的につながると、何となくぼやっとではありますけど、そういう世界観があるのかなというのを、きょう、自分なりにあらためて感じ取れたことでありました。ありがとうございます。

質問は、確かに自由だったり、主体的で、相互に尊重し合って、しかも創造的な世界をやっぱり実現したいというのは、いろんなところで共通の認識だと思うんですけども。まさに、きょう伺っても、仏教って哲学そのものだなとあらためて思いましたけども、こういうのをどう学んでいけるのかなと。私自身、自分の実家の宗派が浄土宗だったので、何も分からず、『南無阿弥陀仏』を10回唱えればいいのかと。それを習慣の中でやったりしてたんですけ

ど。でも、それで何が起ってるのかは、十分、私自身も理解できていませんと。これを学ぶというときに、例えば、鈴木大拙も円覚寺で座禅にいそしんだというのが本の中にありましたけども、こういった学問としてだけではなくて、いろんな体験を通じたり、場合によっては修行的な、身体的な経験、感覚を通じてでないと、なかなか得ることができないのかどうかというのが、少し疑問というか質問であります。これをうまくみんなで共有できるというかなという思いがあつての質問になります。いかがでしょうか。

竹村：ありがとうございます。最近の社会は本当に、単に自分の企業とか自分の利益だけを追求するのではなくて、やはり公益性とか公共性とか、そういうものを追求する方向へだんだん傾いてるんじゃないかと思ってまして。ぜひそういう方向へ向いてくれるといいんじゃないかなと思っております。それで、大拙や西田のものを読むときに、座禅とか、ある種の行とか、そういうものをしなければならないのかということですが、私はきょう、お話しした限りのようなことについては、特に何か行をしなければならないとか、分からないとか、そういうことは、僕はないと思っております。何回も読み返す中で、何か会得するものがあると。そういうことで、十分理解できるんじゃないかと思ひますし、また、そのことを海外等々に発信していったら、どれだけ読んでもらえるか分かりませんが、大拙の本なんか、相当読まれてるようですよね。そういう中で、共通理解っていうものは進んでいくんじゃないかと思ひます。ただ、行等は、やればやったに越したことはないと思ひますよね。

それからもう一つは、やっぱり宗教っていうのは自分の問題ですよ。自分が、例えば死後、どうなるかとか、死の問題をどう考えるかとか、そういう切実な問題意識があつて初めて、そういうものに取り組むものだと思いますから、やっぱり内発的にそういうものに取り組むっていうことがない限り、ただやりなさいとか、やるべきだとか、そういうことはなかなか言うべきものではない世界じゃないかなという気がしますけど。

藤山：なるほど。オブザーバーでこちらの中へ入ってこられた方、挙手をしていただければ、順番に回します。挙手をして、発言を求めていますので結構でございます。挙手っていうのは、ポチっていうやつ、できますよね。そちらからね。よろしくお願いします。それでは佐倉さん、お願いいたします。

佐倉：三井住友銀行の佐倉と申します。本日はありがとうございました。私自身は約10年間ぐらい、ロンドンとニューヨークで勤務した経験があるんですけども、今回の、冒頭のグローバル人材の話なんかも聞いて、全然、10年いてもなかなかグローバル人材になり切れてないな、みたいな反省とかもあつたりする一方で、やはり自文化の理解や発信力が最も重要というお話については、本当に、先ほどもありましたけれども、まさにそのとおりだなと、まさに自分に足りていない部分だなというふうに非常に感じました。

皆さんおっしゃるとおりで、お話自体はなかなか難しいところではあるんですけども、

仮に自分が今回のお話のような、東洋的な思想っていうのを、西洋の特質、東洋の特質といったところ辺りで比較した感じで、仮に西洋の人にお話ししたときに、例えば西洋の場合は、その divide and rule で、そういう侵略主義的なところに行き着く。一方で、東洋っていうのはもうちょっとそういうのを包容するというか、端的に言うと平和主義っぽいところがあるっていうようなニュアンスのことを、仮にうまく説明できたとしたときに、どんな問いが返ってくるかなというのを考えたんですけども。恐らく聞かれるのが、でも東洋思想の日本も戦争したよね、みたいな。あれを侵略というのかどうかっていろいろあるのかもしれないんですけど、戦争したよねと。特に今回の西田何とかの思想っていうのは、そこからまた新しい国家を立ち上げるっていうところでの、いろいろな考えだったのかもしれないんですけども。

先生のような、東洋思想とか仏教的な見方から、当時の日本っていうのを、あの戦争に突入していった日本っていうのはどういうふうに解釈されているのかなと。つまり、西洋的な見方に毒されてしまった日本だったのか、あるいは別の、ちょっと気になったのは、途中で天皇が降りてきてるから、国民は奴隷的な考え方から脱しなきゃいけないみたいな話もあったと思うんですけど、まさにそういう天皇制みたいなところに何か根源があったのか、そういう見方みたいなものを教えていただければと思います。

竹村：なかなか難しいところがあるかと思いますね。時代状況を、どのようにデータに基づいて正確に判断できるかっていうことが非常に問題だろうと思います。戦争、侵略っていうか、確かに悪いこともしたんでしょうけれども、やはり西洋の侵略からアジアを守るっていうか、解放するといいますか、そういう面が全く、あるいはその狙いですね。全くなかったとは言えないかもしれない。あるいは、やむにやまねずして戦争をしたというようなことを言う人もいますよね。私はちょっとよく勉強してないから、何とも言えないんですけども。

仏教的な立場からすれば、戦争は絶対反対でなければなりません。しかし、当時の仏教界はこぞって推進したわけでありまして、これは大いに反省しなければならないだろうというふうには思います。思いますけれども、日本の立場が全て悪だったという判断でいいのかどうかですね。もっとやっぱり歴史の必然性とか、あるいは目指すところ、大東亜共栄圏っていうのも、本当に関係性なのか全体主義なのか、微妙なところがあると思いますけども。やっぱり私自身がきちっと調べてないから、何とも言えないですね。でも、いろんな可能性はあったんじゃないかっていうことを、単純には見たくないっていう思いではありますけどね。私としては。

佐倉：ありがとうございます。

藤山：近代の帝国主義戦争に参加をしたっていう前から、どこにでも国内で戦争はやってるわけですね。じゃあ城戸崎キさん、お願いします。

城戸崎：キャノンの城戸崎です。きょうは貴重なお話、ありがとうございます。途中、切れて、10 分強、私、参加できてなかったのも、もしかしたら人とかぶった質問をしてしまうかもしれないんですけど、ご了承ください。今回の本を読んでいて、あらためて東洋の考えとか禅とか、そういったところに対して、いろいろ考えながら、関係主義的な人間観とか、全てを包み込むとか、個々の創造性をどう発揮するかっていうところが、そこの中にはすごく重要なんだなっていうのは感じました。その中で、科学の進化と、それによる弊害とかいうところの光と影を、どういうふうにすれば、東洋的に考えてそこを克服できるかっていうところを、いろいろ考えたりはしてたんですけど。

私、オフィスで使う複写機の開発をずっとやってまして、今はその開発技術中継を作り上げるような感じをしてるんですけど。その前は、開発チーフを 10 年ぐらいやってたときに、好きな言葉が、近江商人の『三方よし』っていう、買い手、売り手、世の中っていうものに対して幸福な、そういったものに対してちゃんと受け入れられるような商品を作りたいなっていうのを前々から思って、ずっとやっていて。そこの考えっていうのは、CSV とか SDGs とかにつながる東洋的な考えからきてるのかなって、読みながら思っていました。

その中で、これからの世の中って考えたときに、情報社会だったり、科学の急激な進化とか環境問題とかいうのが複雑に絡み合っていて、一つのことで何かを解決することが難しいような時代にだんだんできてくるのかなっていったときに、東洋の思想とかを考えると、一見複雑に見えるものも、大局的な目線で見ると、余分なものを取っていくと、すごくシンプルに考えることが重要なのかなと。シンプルに考えると、物事の本質を突き止めることができて、正しい判断とか、本当に必要なイノベーションっていうのが生まれてくるんじゃないのかなっていうのが、自分なりに今回、解釈をしました。

こういう考え方っていうのが、東洋の、これから複雑になってくる世の中において、すごく重要だっていうふうに私は感じたんですけど、先生のご意見をお聞かせいただきたいのと、こういう考え方っていうのは、学問だけではなかなか身に付かなくて。私もいろんな経験をしながら、挫折もしながら身に付けてきたような気もしていて。こういったことを身に付けていくためには、どういうことを学んでいたり、やっていくことが重要なのかっていうのを、先生のご意見をお聞かせいただければなと思います。

竹村：東洋がシンプルかどうかっていうのは、またいろいろ考えるべきものがあるかもしれませんが、とにかく城戸崎さんのお考えは結構なんじゃないかなと。

城戸崎：ありがとうございます。

竹村：いいんじゃないかなというふうに思いますね。シンプルから見直すっていうのとちょっと違うかもしれませんが、私がきょうお話したのは、非常に根源的な、人間の在り方の根本的なところを考えて、そしてそれをどう社会に結び付けていくかと。そういうようなスタンスといいますか、背景で考えていたということなんですね。私は常々、自然科学は社会科学に裏付けられるべきかなと思うんですけれども、その社会科学っていうのと人文科学、あるいは哲学と政治学とか経済学とか、そういうものを結び付けて、統合的に考えていくと。根本から考えて、具体的な世界のありようっていうものを考えていくと。それが非常に重要なのではないかと考えております。

ただ、自分ではそれができなくて、仏教とか西田だとか、そんなことをちょろちょろやってるだけであって、ざんきに堪えないわけですけども。誰か、そういう人文科学と社会科学をつなげていくという、そういうところをぜひ挑戦してほしいと、やってほしいと思っておりますし、どうしたら身に付くかっていうのはよく分かりませんが、やはり自分で関係の書物を読んだり、人と議論したりしながら自分で考えていくっていう、それしかないんじゃないかなというふうに思いますけども。

城戸崎：分かりました。ありがとうございます。

竹村：いやいや、どうも。

藤山：ありがとうございました。そしたら、菊田さん、お願いいたします。

菊田：東北大の菊田です。きょうは先生、ありがとうございました。素朴な質問なんですが・・・。

藤山：菊田さん、今、プロボストのなんか、やられてるんですか。

菊田：はい。

藤山：どんなことをされてるのか、ちょっと・・・。

菊田：開発研究のところをやらせていただいて。すいません、よろしくお願いします。先生、素朴な質問なんですけど、本を読ませていただきまして、今回、日本的靈性というところ、少し興味を持ったんですが。奈良・平安のところで、当初、中国のグローバルという形で、日本的靈性が生じない中で、鎌倉の時代になったときに大地に根付いたっていうところのキーワードでもあると思うんですが、根本的な部分で、どういうふうに影響して、日本的靈性が共通的な形で始まったのかっていうのが、そこを教えてほしいなと思っております。

よろしくお願いします。

竹村：大拙は、やっぱり島国で共同生活を送って、数百年の歴史を送ってきたと。そんな中で、共通の宗教意識というか、集合的無意識というか、そういうものが生まれてきたんだと。一緒にずっと何百年と生活してきた、その歴史の中で共通の思いというものが生まれてきたんだと、そういう言い方をしてると思います。大拙の言ってることが正しいかどうか、よく分かりませんが、恐らくそういうことなんじゃないかなと思いますけれども。

あとはやっぱり風土ですね。日本の四季。緑豊かな、ちょっと湿潤な、そういう風土がやはり母性的なものに感応するといいますか、そういう信条っていうものを育んだというようなところもあるんじゃないでしょうかね。

菊田：分かりました。ありがとうございます。

藤山：そしたら、オブザーバー席から久村さん、お願いいたします。自己紹介をしながらお願いできますでしょうか。

久村：元日産のフェローをしてました久村といいます。よろしくお願いいたします。ちょっと俗物的な質問なんですけども。今、私、家に MacBook が 3 台と、iPhone がごろごろ転がってる状態にあります。スティーブ・ジョブズが禅で作ったって、よく話は本見ると出てたりするわけですね。それを見ると、単純に、禅は無神だから、無だからいいものができる、みたいなトーンで書いてあるものも多くて、そうかと思ったんですが、先生の書かれた本を読むと、いきなり、無神っていうのは無ではなくて、いわゆるみ心のままにという意味で大拙が言ってるというふうに書いてありますと。ジョブズも大拙を随分読んだというふうに聞いてはいるんですが、どうも表面的な理解しか、みんなしてないようにも思うんですけれども。先生から見られて、ジョブズの研究をされてるわけではないのかもしれませんが、大拙が、ジョブズを含めて、禅に興味を持つ欧米人が、どういうところにどういうふうに興味を持って、何をつかんだのかっていうのは、逆にわれわれ、あまり理解してないのかなというふうに思って、概説いただければありがたいなと思い、質問させていただきます。

竹村：欧米人は、やっぱりキリスト教というのが根本にあったのが崩れてしまったと。そこで、心のよりどころっていうものを無意識のうちにも求めてると思うんですね。そうしたときに、自分の中に仏心というか仏性というか、そういうものがあって、それを発揮していくんだ、みたいな禅が、現代にマッチした宗教として受け入れられたということがあると思います。もう一つは、やはり禅の美学といいますか、例えば墨絵とか枯れ山水とか、非常に洗練された美学を展開してますよね。そういうものは有無を言わず魅力があるという、そう

いうところに引かれたと。そして、その無とか無神とか、そういうものも心地よいということだったのではないかというふうに思います。

ただ、禅の世界をずっと入っていきますと、きょうも西田が、最初の悟りを『見性』といいますよね。つい仏性を見るとか、自己の本性を見るとか、そういうふうに見がちなんですが、実は、自己を超えたものにおいて自己を持つという、その自己に徹底することが見性なんだと。私は超個の個って言いましたけども、その超個の個っていう言葉自体が、実は大拙が、『禅の思想』ですかね。そういう昭和 14 年ぐらいの本の中でさかんに言ってるんですね。超個の個って、実は大拙の言葉です。そういう矛盾的自己同一っていいですか、即非の論理といいますか、そういうところが実は禅にもありまして。そういうところがやはり、なかなか欧米のかたがたには、まだまだ理解されていないだろうなという気はします。しかし、確かに禅の世界っていうのは、魅力はあるんだと思いますよね。

久村：西洋はやはり一神教の神がいて、対比する形で人間がいるという形になっているように思うんですが、それが崩れてきてるというのはやはりあるんですかね。

竹村：それは、これだけ自然科学が発達して、キリスト教から出たということですけども、やはりなかなか神が信じられにくい世の中になってきてるんじゃないでしょうかね。

久村：それはそのとおりですね。

竹村：特に人格神としての神ですね。しかも超越的な。

久村：分かりました。ありがとうございます。

藤山：今、フランスのカトリックと、自分のことをカトリックって分類して書く人で、その中の、毎週日曜日に教会に行く人っていうのは 10 パーセントだそうですね。その程度になって、信仰っていうのはそういう世界になっていて。やっぱりルネサンス以降、神様が決めるんじゃなくて、人間が人間の運命を決めるんだっていう、『人間中心教』っていうふうにノア・ハラリは言ってるんですが。今の西洋人、アメリカ人はほとんどが人間中心教の信徒であって、その中のカトリック派とかプロテスタント派っていうのがあって、コチコチの原理主義者はもっと少ないという言い方を彼はしてますね。

久村：確かに、教会は全てもう形骸化してるという話はよく聞く話ですね。

藤山：カトリックだと、ポーランドと南米が機能してるっていうふうにいわれていて。アメリカのは、やっぱり別の意味で、宗教的な意味じゃなくて、結社として機能してるっていう

ところがあるわけですがけれども。そんな感じに今、なってるんですよ。きつとね。

竹村：イスラムの世界では、結構、信仰は根強いと思いますから、その辺、現代の中でどういうふうになっていくかですね。この前のライシテの問題もありましたけれども。

藤山：実は、宗教を取り上げるときに、やっぱりイスラムを取り上げるっていうほうがいいのかなっていうのも随分考えたんですけども、なかなかテーマとマッチしながらお話しただく先生を探すのが難しくてですね。そもそも、例えば今のイスラムのスニ派の中では、誰が教義を統括してるのかっていう人がいないんですよ。ですから、ああいうイスラム国なんていうのが出てきても、それはコーランに対してまずいんだぞって言う司令塔が、全然、まるでいないという世界なんです。これもまた、対話をするのが非常に難しい世界になってると。実は、シーア派はかなりそういうのがあって。もちろんアヤトラがトップにいるわけですが、大司教もいっぱいいるし、法令も随分いっぱい、何百年にわたって積み重なってきてるんで、シーア派はそういうことがあるんですけども、シーア派はイスラム国に命令できる立場じゃないわけですから。敵対してるわけですから、保てなかったということで。イスラムの話っていうのは、やっぱり耳だけでも、日本の人たちはもっと入れといたほうがいいかなっていう感じは非常にしてますね。山本さん、お願いします。

山本：AGC の山本です。よろしくお願いいたします。きょうは、やっぱり前半の部分は、私もアメリカのシリコンバレーに4年間行ってましたので、非常に思うところが多く、楽しく聞かせていただいたんですけど。後半の部分はやっぱり勉強不足もあって、なかなか難しいところで、これから勉強していきたいなと思っています。前半のところで、梅原さんから確かコメントあったかと思うんですが、自文化理解と発信力が最も重要ですよっていう、グローバル人材の育成のところで、そういう話、あったと思うんですが。私もアメリカ、4年行ったときに、うちの子ども、何年生だったかな。4年生、2年生、幼稚園の年中ぐらいの3姉妹で、全くABCも分からない状態で、日本人が全くいない所に突っ込んだんですけど。

そのときに、やっぱり最初に先生から言われたのは、自分の国の説明を他の生徒にしてくださいということだったんですね。それが小4生で、もちろんABCも全く分かんないんで、そんなのできるわけないんですけど。でも、先生に確認したら、お父さんが作ってもいいんで、発表させてあげてくださいっていうことで。他文化を多分、知らないと、自分の文化が、どこが特異的なのかっていうのは分からないと思うんで、まずそこから、どういうことなんだろうなって調べて。学校のことで考えると、日本ってランドセルですよ。アメリカなんか、スーツケースみたいなのでみんな来てるんですよ。これはアメリカそのものなのか、シリコンバレーのあの辺、中国、インド系が多いからなのかは分かんないんですけど、そういうところがあって、まずランドセルですよっていう話をしたり。あと、共通的なところだったのかもしれないんですけど、子どもが友達が欲しいっていうことで、折り紙とかを学校

でやりますよとか、あやとりやりますよっていうことで発表したら、みんな、私たちもやるっていうことで、特に中国の人、友達になってくれたんですね。

そういうところがあって、グローバル人材の育成っていうところで、高等教育におけるっていう話、きょうあったんですけど、やっぱり小さい頃、だから高等教育っていうよりも、中等教育、もしくは初等教育のところで、身をもって体験して、そういう場に身を置いて体験するっていうところが、学びとしては一番早いんじゃないかなっていう気も受けました。そこは多分、サイトウさんもおっしゃってた部分の一つかと思うんですけど。実際に、一番上の子は中国人、2番目の子はインド人、3番目の子はロシア人とすごい仲良くなって、今では文通したりとかしてるんですね。やっぱりそういう場に身を置いたので、今後も国際化みたいなところで授業も受けたいと、そういうふうに言ってます。

その体験するかしらないかっていうところ。先生、体験は特にしなくてもいいんじゃないですかっていうお話があったと思うんですけど、インターネット社会で、いろいろ世界の距離感が短くなったっていうところもあって、こういうものをうまく使って、初等教育ぐらいから、こういうグローバル化人材っていうか、そういう環境に身を置かせてあげるっていうのは一つあるんじゃないかなってすごい思いました。スタンフォード大学なんかも、人種のサラダボウルじゃないですけど、アジア系、ヒスパニック系、白人、黒人、インディアンもいますし、本当にそういう環境で育ってるから、やっぱりそういう理解がしやすいんだろうなっていうふうに思ってますね。そこら辺について、日本でも何かそういう動きがあったらいいのかなっていうふうに思いましたっていう、質問でもなくなっちゃったんですけど。

あと、『己立たんと欲せば、人をして立たしめよ』っていう言葉は非常にずっとしるなっていうことで、この言葉が出た国が今、最も自国主義っぽくなっちゃってて、ちょっと残念だなんて思いつつも、どこの国も自国主義っぽくなってきちゃってるんで、もう一回、世界的に、こういう言葉っていうか、そういう思想をもう一回思い起こして、世界平和、繁栄にいいばいになっていう思いです。以上です。何かお言葉いただければありがたいです。

竹村：自国の、やはり伝統とか文化を深く理解するっていうことを、初等教育のときからやるべきだと。これはサトウさん、ぜひお願いします。重要だと思うんですよ。やっぱり国語とか日本史とか、非常に情操教育としても重要だろうと思うんで、ぜひ文科省、頑張ってくださいと思います。それで、乏しい経験なんですけど、台湾の高雄のほうの大学の日本語学科に招かれて、なんか講演してくれと言われて、日本のことを話そうと。日本語学科の学生ですから。私、日本には四季があるんだと。その四季の感覚っていうのが、文化の隅々まで関わっているんだと。手紙の書き出しの文から始まって、始まっているかどうか分かりませんが、いろんなものに四季の影響っていうものがあって。四季をもたらしけるものが何か、一言で言うと、芭蕉の造化っていうようなものですね。

きょう、超個の個って言って、自己を超えたものにおいて自己を持つと。その自己を超えたものっていうのが、必ずしもすぐにはぴんときないかもしれませんが、でも日本人は大体

において、造化しながらっていうか、造化の下に自分があるっていうか、そういう感覚はあるんじゃないでしょうかね。日本人は宗教的でないというような見方もありますけれども、それは宗教の在り方が違うわけでありまして。トインビーかなんかですかね。竜安寺へ行って、ここに聖なるものがあるというようなこと言ったとかですね。日本独特の聖なるものの感覚とか、超越なるものの感覚とか、そういうものがあって、それは四季の風土に育まれていると。そういうような面もあるんじゃないかなと。その辺も日本の伝統の、一つの大きな柱ではないかなというふうに思いますけどね。

藤山：今、チャットでもそれに近いお話が出てるんで。これ、竹吉さんかな。もう一度、話したい・・・。

竹吉：ありがとうございます。

藤山：竹吉さん、それから松元さんでご発言をいただけたらと思います。

竹吉：ありがとうございます。流れがこちらにうまく流れたんだなと思うんですけど。ちょうど私、インドネシアで3年間、駐在させていただいたときに、必ず出てくるのが、アメリカではご法度の、いわゆる「あなたの宗教、何ですか」っていうのと、「あなたの好きな政党はどこですか」みたいな話を、インドネシアでは「あなたの宗教、何ですか」っていうトピックスで、普通に会話があるんですね。彼らは成人になるときに、いわゆる一つ、唯一無二の神を選ばなければいけないっていうのが、IDカードの中にも入ってくるような思想観でして。例えば、日本人に対して、「あなた何を信仰していますか」って、私、仏教って言ったんですけど、「あなた仏教なのね。じゃあ仏教について語ろうよ」って。一切、語れないんですね。よく、日本に仏教と神道っていうのがある。神道って何？とか、日本に興味ある人は、神道と宗教は一緒の空間にあるけど、どっちを信仰してるの？って、一切、語れないわれわれがいて。それって、年を若くすればするほど、今って、宗教に結び付いてる思想観って一切なくなっていると思っていてですね。

それとは別に、例えばタイとか中国とか韓国に行くと、宗教色は強くなってる一方で、日本に海を渡ると、一切、宗教色がなくなってくる国民性っていうのが、ウメハラさんの、例えば東洋における日本の、いわゆる位置付け的なものもあるのかなと思っていて。資本主義を信仰していった中で、宗教的な考えが薄れていったとか、生活の中に、例えばお盆っていても、お盆って何するんだっていうのとか、そういうのは残っているんですけども、親が教えないと一切伝わっていない国民性なのかなっていうのを一部、感じていて。そういった部分が、東洋における日本的な考えなのかなと思っていたんですけども。それに対して、松元さんに少しご意見いただいたら。このまま松元さんにお渡しいたします。

藤山：今、インドネシアは、確かパンチャシラ。

竹吉：そうですね。

藤山：最初は五つ、今は六つになってるらしいんだけど。そのうちのどれかの宗教っていうのを信じなさいっていうことになってるわけですね。実際にはムスリムが多いわけですけど。じゃあ松元さん、お願いいたします。

松元：竹吉さんからそういうお話があったもんですから、日本人は無神論じゃないかというようなチャットがあったもんですから、私からお答えしたのは、いや、一神教でないという意味ではそうだけれども、無神論というのは違うんじゃないでしょうか。それは、日本はクリスマスやったり、神社で初詣したり、仏教でお葬式やったり、ごちゃ混ぜになってるようにならざるを得ないけれども、その背景にあるのは、ちょっと言葉の誤解を臆せずに申し上げれば、一種のアニミズム的な感覚であって、その感覚っていうのが、草木国土悉皆成仏、それから浄土真宗の弥陀の本願で、全てのものが救われる。全てのものっていうのは、必ずしも人間にも限らないっていう、そういう話になってきてるんじゃないでしょうかというお話を、タケウチさんには差し上げたということです。

ただし、これはなかなか外国の人には理解し難いっていうか、日本人もそれを明示的な言葉で語るっていうことはなかなかしないんで。西田とか鈴木大拙は、それを明示的な言葉で何とか語ろうとしたということで。日本人もなかなか語る人がいないもんですから、日本人も西田とか鈴木大拙を読んでも、なかなかよく分からないと。よく分からないけれども、何となく分かるなっていう、そういう感じを受けるのが西田とか鈴木大拙じゃないかなと。今回、また先生のお話を伺いながら、ちょっと思ってたところですが。

グローバル化という意味においては、日本人が語らないっていうところが、実は最大の問題で。主客二元論というお話がありましたけれども、西洋っていうか、私もアメリカに留学してたことがありますけれども、向こうの人は言葉で発信しないと理解してもらえないということが当たり前になってますから、だから自分のことを語りなさいと。日本の文化は何ですかっていうことで、まず小学校のときからそういう教育を受けると。日本はそういう教育を受けてなくて、言葉で発信しない人も理解してあげましょうねっていう教育をしてるんですよ。だから、自分から発信していくっていうことをしないと、自分のことを語れるようにして、相手のことも理解しましょうっていうことを、それがグローバル人材で大事なんだって、それはおっしゃるとおりだけれども、それは発信してなんぼの話で。

グローバル人材理論で今、一番欠けてるのが、発信しなきゃいけないんだと。教育でいえば、ディベート教育っていうのが、私は本当に一番欠けてると思ってまして。これは実は、昔から私は申し上げてるんだけど、なかなか日本の文化自体が、発信するって、むしろ、あまりしゃべらないことをもって金とするみたいな、そんなものがあるもんだから、なかなか一

般的になっていかないんですけれども。実はグローバル化しようと思ったら、そのところをやっていかなくちゃいけないんじゃないかなということを、きょうも感じてたところでしたね。

藤山：松元さんの言うとおりですよね。言葉の役割ってというのが、日本ではちょっと違う。ホモジニアスな世界だったし、先ほどの、変化未然なり、未詳なりってところのものをつかみたいってところになると、言葉が説明的ではどうしてもなくなるわけで。そういう言語空間の中に生きてる人がディベートをするってというのは、それだけでもハンディかもしれないってところもあるのかもしれないと思いますけど。おっしゃるとおり、同じ東洋でも、例えば韓国なんかは、朱子学の伝統があったせいか知らないけど、結構発信するのは得意で。日韓問題なんかは、日本の主張よりも韓国の主張のほうが、グローバルには行き渡ってるってというのがほぼ定説になってるので。やっぱり言わなくちゃいけないときは言わなくちゃいけないんだと思うので、その辺はこれからどういうふうにつくっていくかって、大変なことだと思いますね。先生、ちょっとお願いします。

竹村：私？ おっしゃるとおりだと思います。だから、自文化理解だけじゃなくて、自文化理解、発信力。これをいかに育成するかっていうことがやっぱり課題だろうと思いますし。ただ、今、高等教育の世界では、昔のように教える教育じゃなくて、自ら学ぶ教育ですね。学生がいかに自ら学ぶか。そして、授業に参加していくか。そういう姿勢っていうものをいかにつくり上げていくかっていうところに一番腐心しております。そういう中で、英語力とか外国語力だけでなく、コミュニケーション能力ですね。このコミュニケーション能力を授業の中でいかに育てていくか。これが今、大学の一番大きな課題になってるんじゃないかと思います。これは数年前から、ずっと実践されつつある。なかなかそう簡単には実らないと思いますけども、そういうところを目指してやってると思います。

藤山：発信力が非常に重要だっていうことは論をまたないんですけれども、その発信が言葉によってされてるっていうところも、また一つの問題を生んで。今の SNS 空間の中で、言葉っていうのが、フェイクってことを非常に、厳密に区別できなくて、むしろロゴスよりもジェスチャーのほう、身ぶりとか表情のほうが伝わってるのが明らかに高いと。言語が今、世界では伝わってないっていうのがどうも出てるみたいで。言語だけじゃなくて、行いとか態度とか身ぶりとか、そういったものも発信力の全てに関わってるんだと思うんですね。その辺も併せて、日本は発信の仕方の構築っていうのをする必要があるのかもしれないですね。ありがとうございました。

最後についていう方がいらっしゃれば、あと数分ありますが。

なければ、14 回までずっと詰めて、オンラインになってからは月に 2 回もやらせていただいて、皆さんも大変だったと思いますが。きょうは竹村先生から非常にいいお話を聞いたの

で、皆さんで拍手をして、感謝の意をささげたいと思います。ありがとうございました。

竹村：どうもありがとう。

藤山：それで、小原さん、今後どういうふうになってるのかっていうのをちょっとお話を
して、クローズしたいんですけども。

小原：私のほうからですか。15 回ですけども、まだ実際、交渉中で、講師の方が決まっ
ておりません。この 1 カ月ぐらいの間に決めて、開催をしたいと思ってます。追って、これは
ご連絡申し上げます。

藤山：1 カ月以内に開催できるかどうか、分かんないよね。

小原：分かんないと思います。だから、今のところは 9 月、10 月というご提案をしてます。

藤山：10 月、11 月って言ってるんじゃない？

小原：間違えました。10、11 ということで言ってます。それと前後するか、16 回目になる
か分かりませんが、一度まとめの形で、皆さんに A4、2 枚ぐらいのエッセーを書いて
いただいて、感想を書いていただいて、それを皆さんで共有して、みんなで議論するという
場を設けたらいいんじゃないかなというふうには思っています。この辺も藤山さんにご相
談しながら、また進めていきたいと思います。

藤山：親睦会をやろうやろうって言ってて、こういうコロナの時代になっちゃって、このま
ま、オンラインのまま先生のお話聞いてるみんなで議論して、15 回終わりましたっていう
のもなんなんで、もしよろしければですけども、最後に 1 回、15 回通して聞いてみて、あ
のときのあの話が私は面白かったとか、自分はこう思ったとか、15 回受けて、何かが変わ
ったとか変わらなかったとか、そんな話を皆さんにちょっとだけ書いてもらってっていう
ことも考えてるんですけども。そんなの嫌だっていう人、いらっしゃいます？ これも聞き
方なんですよね。「やりたい人」って言うと、しーんとしてるんですけど、「嫌だっていう人、
います？」って言うと、なかなか言えない。と思うので、そっちのそんな雰囲気ちょっと
考えてますので。15 回が 1 回増えるだけなので、15 回目、16 回目はそんな感じで、年内に
全てのプログラムが終わればいいかなというふうに思ってます。16 回目は 1 月になっても
許していただけるかと思いますが、そんなような感じで捉えております。

この 7 月、8 月、9 月は全部で 6 回、大急ぎでやったもんで、皆さんも、この 7 時から 10
時まで、掛ける 6 っていうのは結構なものだと思うので、ご参加いただいて大変感謝をして

おります。ありがとうございました。きょうはまた東洋の話が聞けて、やっぱりこういう話が入ってるといいなっていうふうに非常に感じました。きょうは先生、どうもありがとうございました。じゃあ皆さん、連絡を待っているようにしていただければと思います。ありがとうございました。失礼いたします。・・・。

竹村：ありがとうございました。お疲れさまでした。

一同：ありがとうございました。

(了)